

青年
立志人物の食客時代

異域探險士著

94

389

東京大学図書



新水の勢

同じ新水の勢を以て、権勢の役に服す、一は碌々として一生を頓使に甘んじ、一は寧々として主權の地位に立つ、抑も何が故ぞや、彼は苦を苦として苦に屈するなり、此は苦が苦とせずして苦を利するなり。
大概 世の貧富貴賤の岐る、所、此の理に依らざるは妙し。
著者 世間の消息を際へたとして、現代名士が流に困頓人に倣つて食し、他に寄つて棲きたる苦境を描いて殆んど盡せり
讀者 徒らに本書を東て奇話珍談を説くものとなさず、著者の微意の存する所を悟するあらば幸甚。

明治三十八年九月

著者識

明治
38 9 25
肉交

目次

福岡健良 (古河溶銅所々長) 一頁

醫者の家に食客して通學、草摘り、便所掃除の命令は濫澤の夫人

陸奥宗光 (外務大臣) 九

幼時一家の浮沈と其苦心、寺男の次は學僕、不思議な縁で娼妓の待遇、
旅費才覚の魂膽と美談、龍馬に知られて後の浮浪

井上角五郎 (炭鑛鐵道會社專務理事) 二四

七圓取りの教員を廢めて食客に住込む、蒲團責をされた揚句は燒芋御馳
走、或時は罰金或時は鬻聞沙汰。

濱野茂 (實業家) 三三

奉公廻はり八十餘軒を借財二萬八千圓、無錢な客を宿泊る親切な旅館、
横柄な食客條件提出、威ばつた上に資本の融通。

清浦奎吾 (農商務大臣) 四三

浦和在の百姓家に食客境遇。

犬養毅 (憲政本黨總務) 四七

何處へ行つても眞平御免、藤田茂吉に知られし發端。

古河市兵衛 (銅山王) 五三

奥州に叔父を尋れる因縁は夫れ、食客中貸金催促の大功名。

富井政章 (法學博士) 六〇

無一物の留學。食客の苦心、講義の盗み聴き當時の奇劇。

野津道貫 (陸軍大將) 六七

食客兄弟餅搗き大食で一驚。

田中常德 (日本郵般會社船客課長) 七〇

英人の學僕を廢めて稻葉家に寄食す、放逐が却つて成功の原因。

佐藤進 (陸軍軍醫總監) 七六

博士の將來と母の苦心、醫學に志した魂膽話、佐藤の家に食客未は養子。

辻敬之 (大日本圖書會社重役) 八七

向ふ見ずの計畫先きから外れ、詫も叶ふて元の家に食客。

菊地武夫 (東京法學院大學々長) 九一

舊藩南部伯爵に寄食中の數々。

江崎禮二 (寫眞術大家) 九六

叔父の許に寄食中の出来事、食客中貰つた金は悉く貯蓄、横濱に行つて
寫眞屋に厄介。

田中壤 (北海道造林會社長) 一〇六

畫家の家を喰ひ廻はる。

高木與兵衛 (清心丹本舗) 一〇九

秀才に感じて飯炊役の更代、師の諫言に決心上京す。

西郷隆盛 (陸軍大將) 一一五

初對面に東湖の家で小間物見世、立廻りに門生の冷汗。

添田壽一 (興業銀行總裁) 一二〇

書家を廢めて上京第一回目食客、他人の力で遂に成功。

星亨 (政治家) 一二五

最初は醫家に次は幕臣某に食客。

光村彌兵衛 (實業家) 一二九

悪戯をされて主家を逃げ出す、醫家を辭して沖商の家に轉がり込む。

中村彌六 (林學博士) 一三九

食客中出教師の内職、意外な手段で意外な待遇。

佐々木政吉 (醫學博士) 一四六

俺の伴が醫者になるが、東洋先生の食客後は養子。

正木照藏 (日本郵船會社貨物課助役) 一五一

初めは欣喜後は失望、半食客半職の境遇は何時も。

白石直治 (理學博士) 一五七

激奮上京後藤伯を口説く。

後藤恕作 (後藤毛織物製造所長) 一六一

大久保利通に知遇せらる。

津久見雅雄 (海軍少佐) 一六五

津田男のお影で二試験に合格、兵學校在學中の出來事。

梅浦精一 (東京商業會議所議員) 一六九

醫部某に教はる、送資を絶はつて下宿屋に轉がり込む。

鳩山和夫 (早稻田大學々長) 一七四

塾生より焼芋買の命令、同生一致假病の魂膽。

淺野總一郎 (東洋汽船會社社長) 一八〇

昨日迄は御客今日は食客。

伊澤修二 (貴族院議員) 一八五

幼時より食客しての苦學、毎日三里餘も通ふて會話の稽古。

野中萬助 (回漕業) 一九二

奉公先を飛出して食客の一幕。

星野恒 (文學博士) 一九六

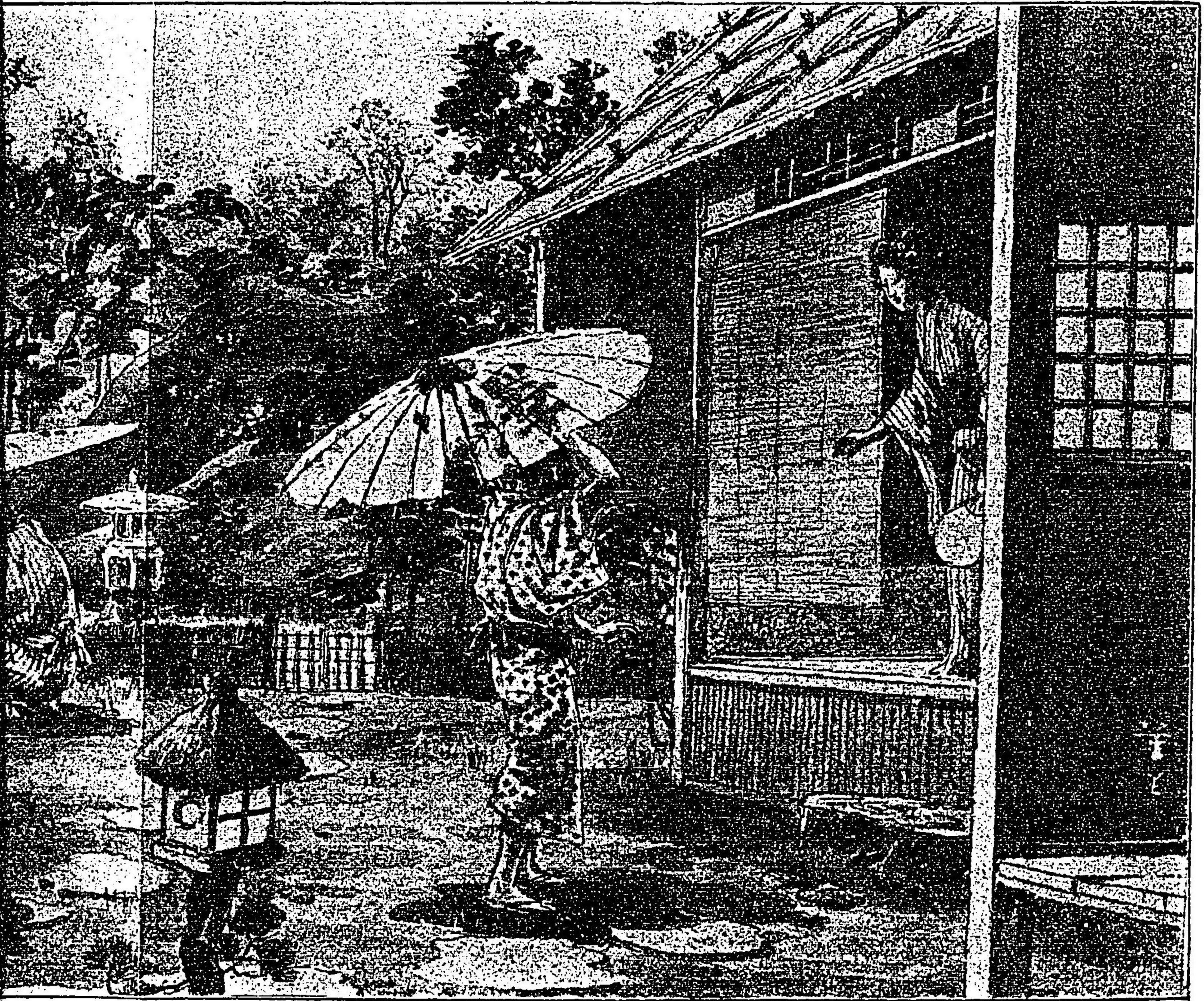
八年間食客しての苦學。

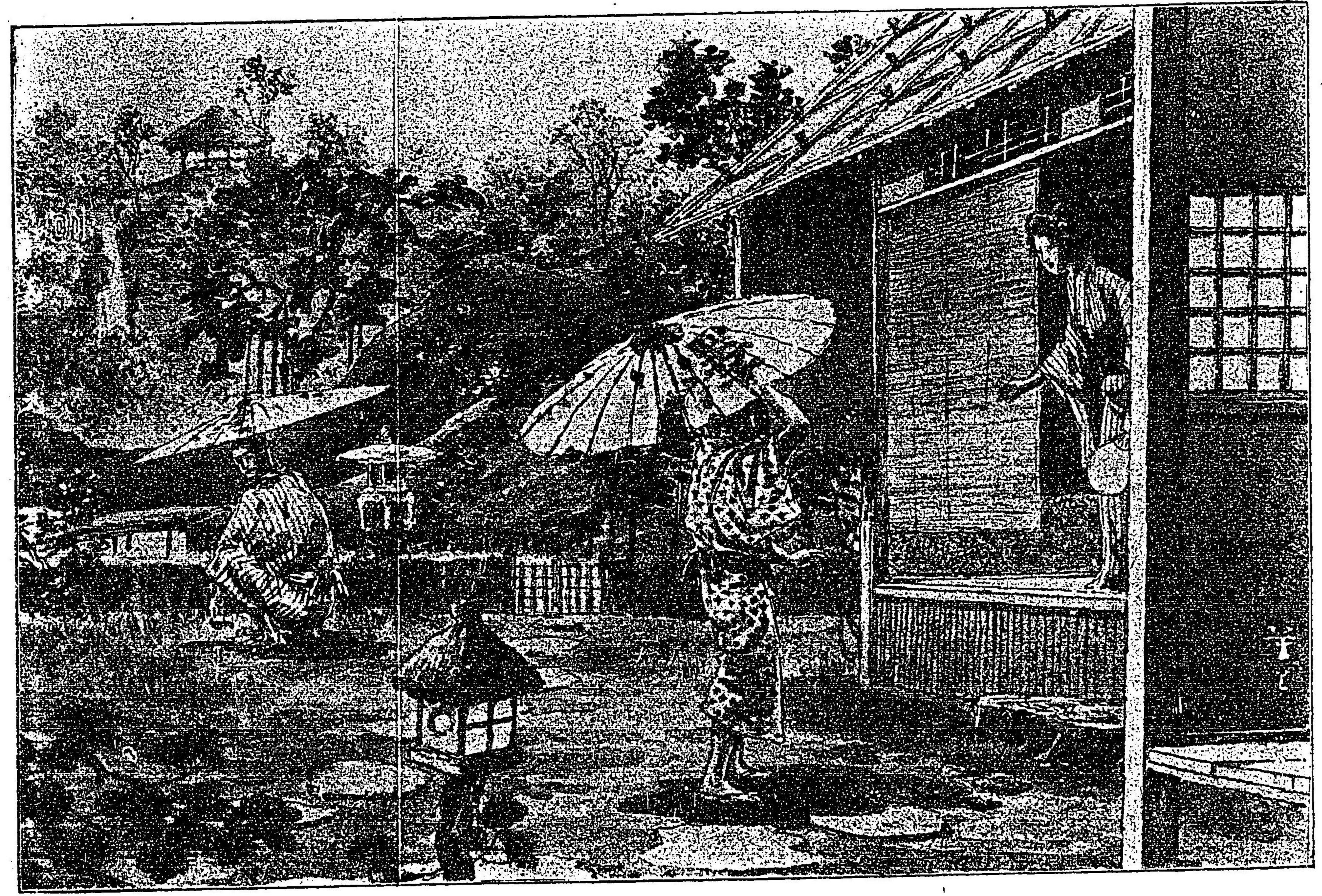
太田實 (東京水族館長) 一九九

食客の傍ら筆耕、親戚知己の勸告を排して上京又も食客。

伊東巳代治 (樞密顧問官)

食客の巳代と仲働もみよとの奇譚。





青年
人物の食客時代

墨堤隱士著

福 岡 健 良

遠海男の知遇を受け、鐵山局に出仕して月俸八圓取りより上げた氏が、半生中の経歴は誠に後進者の興奮劑ともなるであらう、就中小坂銀山に於ける精神肉體剛方面の苦痛は、往々憤涙を瀾らしたとか、然かも氏は、堅忍克己遂には古河市兵衛翁に用ゐられ、古河溶銅所長と迄漕ぎ付けたのは、畢竟氏が伎倆の卓越する結果に外ならぬ譯さ、然かも氏は古河家の事業に對して爲したる五大事業は一面に於て唯かに我國の鐵業界に大面目を施して居る、今や氏世を去るも其事蹟は萬世に朽ちま

醫者の家に食客して通學

氏が東京に来て初めての食客先は、當時第一流の名医と云はれし伊
東方成の熟であつた、然らば何うして此所へ入るべき手順になつた
かと言へば、氏の養父春青は埼玉の深谷在大臺村に醫業をやつて居
たので、近所の澁澤家は病家先に當り、其上春青が殊の外精神的仁
術な所を見て、一方ならず譽めもし信用もして呉れた、これがそも
縁の端、澁澤男が外國から歸られて大藏省に入つた時、春青は男を
東京の宅に訪問し、悴健良氏が身上を托した、云ふ迄もなく悴を
醫者にする積り故、何所へなり貴方が信ずる人の家へ、修業に入れ
て貰ひたい位なお話、澁澤男も早速承知した結果は、前申す通り名

醫伊東の食客となる事が出来た。

暫らくは此家で勉強したお影で、後大學南校に通學し切りに獨逸語
を稽古したが、此時分の同じ仲間は今、青山、田原、井上、三浦な
ごの博士方で、夫れはく却々以て暴れたもの、あれで醫者になつ
た日には患者の取扱も嚙手荒くするであらうとは、誰彼となく評
判し、居つた、所が明治五年に開成學校が創立され、氏も拔擢を受
けて入る譯になつた、然し入るに付て官費生は申分がないが、卒業
後は向ふ六箇年の間無給で奉職せねばならぬ故、氏も能く考へ
て見れば其無給が馬鹿くしい、加之に六箇年も縛ばられて居るの
なら、一層の事ソナナ學校に行くのを廢めて他の學校に入らうと、

忽ち折角の撰抜をも御免を蒙り、今度は澁澤男の家に食客となつて、本郷の壬申義塾とやらに轉學した。

草摘りと便所掃除の命令は澁澤の夫人

前開成學校に入るべき選抜を受けた迄は、本人も一心不亂に勉強したものの、其後はケチが付いたと見えて、勉強の方も少し怠け勝になり、道樂もやつたさうで、澁澤夫婦も切りに氏が平常の監督に注意し居られた、取分け夫人は賢才貞淑の名高く、家庭も至つて嚴格であるものから、氏も折々は居間に呼付けられ、意見などを喰つた事があるが、殊に同家に食客中の奇談を紹介すればコンナものです。

氏が食客仲間、男爵の夫人の甥で勝太郎といふ人が居つた、此人は氏よりは一つ年齢が若い方で、ある日曜日とやらに、夫人は兩人に向ひ運動がてらに庭前の草むしりを命じた、兩人賢しこまつて早速夫れに着手したが、恰度夏季炎天の眞盛りであつた故、當底帽子位では凌ぎ切れない、そこで氏は名案を考へ出した、先づ大きなバシ傘を二本程携へ来て、一本は勝太郎に渡し一本は自分用にと、懸がて其傘を開けて柄を脊に指し、手拭を以て確と頭に縛り付けた之れならば立派な日光除、却々の新発見と洒落込んで居たのを、何時しか夫人に発見けられたから耐まらん、夫「お前等は何を爲て居るの、マー夫れを罷めて此方へお出で」と、突如一本參られた、兩

人は不意を喰つて驚いたの驚くまいものか、怖るゝ例のパン傘
を取りはづし、夫人の前行つた、すると夫人は亦も兩人に向ひ、
夫「能くお聞きよ、何にも人が無くてお前方に草むしりをさせた譯
ではないよ、徒らに食べたり寝たりして居るのは、詰りお前方の害
になると思つて、少しは、運動の爲めと又一つには世の中の事を知
らせようと思つて命付たのです、夫れを何です、彼様な悪戯をしな
がらなさるとは、能くゝお前方は我慢の出来ない男で……、ソ
ナ譯なら學問をするも無益な事、今日限り自家に居るのは斷るに依
つて、サツサと國にお歸んなさい」と、散々な叱言に兩人言葉も出
ず、暫しは頭も上げられなかつた。

夫人は果然嚴令を下して奥の座敷に歸ると、氏は他の一人を顧み、
氏「君飛だ失策をしたナ、何もア奥さんに怒られては明日から
固るよ、況して親爺(遊澤男)が耳に這入らうものなら、夫れこそ一層
嚴い叱言を喰ふせ、此上は據處無い故兩人が奥さんの所へ行つて、
平降服に降服らうよ、君何うする積りか」と、勝太郎食客先生もへ
コタレ切つて今は一言もなく、蘇張の辯陳平の智も出ればこそ、勝
「僕もそうするがよからうと思ふよ、アンマリ叔母が恐ろしい顔を
したので、僕も驚いて仕舞つたよ、兎も角叔父に口傳られぬうちに
降服らうと、兩人はかみ一決して奥の間に行かふとする途端に、同
家の書記某に立會つた、そこで某に逐一右の出來事を物語り、何う

か前過を宥して貰ふべく頼んだ、某も早速夫人の前に行き、本人等の意向を陳べ重々其罪を謝した時、夫人は答て曰ふのに、悪いと思ひ濟まぬと思つたら宥して上げませうが其代り罰として更らに或用を命令けるによつて、兩人に此方へ来いとの復命、某も戻つて兩人に告げたが、宥されたのはよいが、罰としての命令とは何事か知ら心配で、耐まり兼ね、直ぐ様夫人の前に用向を伺つた、所が豈計らんや今度は便所の掃除とは、兩人もイヤ／＼ながら、しぶ／＼之を果したとか、今に笑ひ草となつて居る。

ぬさふらふ
千松ばかり
いさしがり

陸奥宗光

日本で内閣の制を設けられてから、外相の椅子に就いた者を数ふれば、井上、伊藤、大隈、青木、板本、陸奥、西園寺、西、加藤、曾根、小村と何れも相應に手腕を揮つたが、中にも適任者さ指され、敏腕家と云はれたのは陸奥であつた、二十七八年日清戦争に伊藤總理が軟弱的外交に引換え、彼れが絶對の強硬手段には、流石の李鴻章親爺も驚愕して仕舞つたとは、當時政界に噂立てられて居た、惜しい事には靖和落着を土産に此世を去つたのは、何處迄も感らい紀念として、國民の忘れ得ざる所さ。

幼時一家の浮沈と其苦心

由來和歌山からは却々人物を出して居るが、殊に伯が世に名を知られてよりは、又一層和歌山人の鼻も高くなり、花も咲いて來た、所

で伯が家は伊達姓を名乗り、先考が祖父の後を受け継いだ時分には僅かに跡目知行三百石に過ぎなんだが、藩の監察を勤むること八年其の爲めに精勵の功で五百石に加増された、殊には同藩の執政たりし中山筑後守に識られ、此男を経て献策する所は一々用ゐられ居つた、ソナナ譯で當時は伯の父と中山筑後守、及び伯の母の父渥美源五郎との三人が、殆んど藩政を左右せし有様であつたのだ。然るを其後江戸詰の水野土佐守が、段々勢力を得て来て、云はゞ國詰と江戸詰との間に衝突が起り、其結果は公儀を楯に御不審の次第と許りで、とふく伯の父は顯位より打落し、幕府の附家老安藤飛彈守の家へお預けとなり、次いで城下田邊といふ所に禁錮された、

此時歳も五十にもなり常底再勢を盛り返すことも覺束なく、自分諦めて天保七年とやらに五郎を養子に貰ひ、特旨で知行三百石の跡目相續を仰付かり、新たに小普請組に入れられ、其翌年の正月家名改易の嚴命に接した爲め、據所なく和歌山城下十里以内の處に居る事も叶はず、泣く泣く一家は家敷を引拂らつて、高野山の麓なる鯉野村といふ處に移つたのである。恰度此時伯は僅かに九歳で、我家の改易といふ話を聞いて幼な心にも残念がり、床に在りし伊達家重代の大刀を抜いて、表の方へと駆け出した事もおつたさうだ、右様な次第で藩の所置を恨むの一念は、深く伯の骨髓に徹したと見ゆ、朝夕之れが復讐を口走つて

ると、折りしも京の五條から来た某書店の主人は、伯が幼時の此氣象を見て切りに感心致し、伯に向つて曰ふのに、あなたが若し紀州家に復讐しようと思ふならば、宜しく先づ紀州の領分に隣して、天領の代官になつたらよいでしようと思つて呉れたので、伯は雀躍して喜び、其書店主人にすがつて共に京都に上り、或る老吏の食客に住み込んだ、これが抑も食客の初めで、毎日地方例録落穂集なんごを拾ひ讀みし、傍ら算術の稽古をしたのが、詰り伯が後日官に就いて後地租改正の議を提出する如き、此時に於ける素養より出たと云つて差支はなからう。

寺男の次は學僕

伯は前の如く、京都に食客として勉強し居たもの、當底永く此地に止まるを許さぬ爲め、再び細野村に歸り直ぐに江戸に出る決心を抱いた、或日の事萬端の用意も出来たれば、別れを慈母や妹に告げいざ出立しようとした時、慈母は弱年を憂ひて暫ばしの間止まるべき程に、彼れ是れと諫めたが肯き入れない、とふく伊勢路を経て東海道は五十三次、テクテク歩るきでやつて来た、此時年齢僅かに十五歳の小童、何んとマー意氣壯なる事であつたよ。漸やく江戸に着くと、麻布は高野山出張所に入つて寺男をした。思へば紀洲藩大番頭で八百石取りの家に生れ、若様育を受けた身が今は轉々して此境遇、元より艱難の程は察せられる譯、暫らくの間

は寺男で糊口を濶いで居たものの、前途大望を控ひ居る伯の何でか
一處に辛棒し得られよう、其後四方に流浪して一層の苦勞を嘗め
盡し、或時は寫字を内職に聊かの賃を取り、又或時は漢醫の食客と
なつて、草根木皮を刻みなごし、續いて有名な儒者安井息軒、水本
成美なんかいふ塾に學僕として住込み、螢雪の苦學を積みつゝある
と、程なく疥癬に病み付かれ、イヤハヤ目も當てられぬ姿となり果
てた、かふなると誰れとて世話をして呉れる者も無し、將さに路傍
に殞れようとして居たのを、天如何で此奇才を見殺にすべき、恰度
其時神田お玉池に住んで居た有名な外科醫、某の許に救ひ取られて
暫しは食客となり、玄關や臺所の拭掃除をなし、傍ら病氣を治療し

たとか。

不思議な縁で娼妓の待遇

所が茲に奇劇こそ演せられた、夫れは外でもない、恰度芳原は某樓
の娼妓が例のお定まり病で、此家に就療し居る者があつた、食客殿
の伯も同病相憐むの一件で、深く其薄命を氣の毒に思ひ、彼れ是れ
となく面倒を見つてやつたので、娼妓の方でも彼れが親切に感じ、
病氣が癒つたら屹度御禮は致すなど言つて居た、運よく一月経たぬ
うちに全快し元の樓に還ると、或晩の事文をば伯の許に寄こして、
何うぞ今夜濟まぬが来て貰ひたいといふ意味の文句、誰れが讀んで
も餘り悪くない文の、伯も喜んで片手に文を持つた儘一文なしで芳

原へとくり込んだ、程なく目的の樓に登り相方に遇ふたら、先方も非常の待遇に夫れから後は三日と置かず通つたが、何時も勘定の方は娼妓の方でして呉れる始末、此時分は自身も病氣こそは癒つたけれど、まだ某醫の許に食客中で、何處へ行かふといふ當も無いのに前のスコモテに主人公の前には悪いと知りながらも、密々其家を抜け出て芳原通ひ、かふなればよし陸奥でなくとも肝腎の放蕩費免除と来て居れば、誰れにも出来もし又足繁く通ふ道理、兎角樓中にも陸奥と某妓とのマブ的關係を、切りに噂し居つたのである。此くして彼は全く放蕩に終つたか否やさうでない或夜の寢物語りに娼妓は陸奥に向い、娼郎君の御様子を見れば、何うも丸ツきりの

道樂者では無いように思はれますが、今のうちに身の振方を付けたがよう御座いませう、私も苦海の身に沈み居ればとて、及ぶ限りは盡しますから」と親切込めての勸告に、流石の陸奥もかふ言はれて見れば成程最もな話、彼れ娼妓を顧みながら、陸「お前の言ふ通りかふ毎日遊んで許り居つても詰らぬ譯、實は京都に行つて一旗上げたいと思ふけれど、お前もかねて知てるように素寒貧の身の上、據所なくかふして居るのさ」と、答へた、娼妓も戀れた男が此くありとすれば、如何で黙まつて居られようものか、況して先に私も苦海の身に沈み居ればとて、及ぶ限りはと言つたこともあるので、娼「ソんなら私が京都迄の旅費を工面しますから、何うぞ出世し

てください、私は此所で郎君の成功を祈つて居ります」とは、實に色は賣れども心の誠泥の中にも蓮の花といふ都々逸も、將さに此娼妓の性格を現はしたものが、彼等風情に此事ありとは、却々以て感心至極さ。

旅費才覺の魂膽と美談

京都迄の旅費、彼れは如何に工面せしか、申す迄もなく樓主に掛合ひ、已れの年期を増して二十兩を借り受けた、否な樓主も娼妓の方から勘定を才覺して、三日に置かず登るような客が付いては、結局娼妓の爲めにも樓主の爲めにもならぬ譯、一には他の朋輩仲間の見せしめにもならぬと思つて、折あらば陸奥を例のおはきものにしよ

うと、御内所でも密々相談してた所る、陸奥を京都に遣るに付ての旅費とあつて見れば、樓主はモツケの幸ひ、前記の如く年期増の證文を取つて金を貸した。

陸奥は彼れ娼妓が身を刺いで迄も、自分の爲めに盡して呉れる親切を謝し、二十兩を貰つて直ぐ様京都へ馳せ上つた、其後維新を迎へ陸奥は大阪府の權判事に就任し、時の兵庫縣知事たりし伊藤博文と廢番置縣の建白書を手に東京に登つたが、其折親切を受けた例の娼妓を尋ねて當時の恩を謝さうと、獨り忍びで芳原に行つた、すると戊辰の騒ぎで芳原も大分變つて仕舞ひ、目的とする娼妓の行方も知れない、彼れ是れと探がした結果深川の假廓甲子樓に、住換し居る

この事を判明したので、昔に代る今は羽織袴の扮装、銀作の大小を挟み意氣揚々樓に登られた時の立派さ、件の娼妓も之を見て喫驚仰天、嬉しいのと耻しいとで暫らく對面もモジ／＼居た、其後は申すに及ばず諸君の宜しき推斷を乞ふと致し、陸奥は自ら媒介人となり、日本橋邊に住まうかねて知合の某商人に嫁がせ、資本迄も呉れて木綿商を営ませたこの話は、何處迄も小説的らしく思はれる。

龍馬に知られて後の流浪

談は前に戻つて、彼れが食客時代を今少し紹介しようか、文久三年彼れは中村小次郎といつた頃、京都に上つて土佐の傑物坂本龍馬に面會すると、早くも龍馬は小次郎の才を見抜いて、非常に愛遇した

上越前の藩邸に家老である、岡部造酒助の許に托した、云はゞ食客に頼んだ譯で、岡部も其士とは何人かと尋ねた故、龍馬中村小次郎と申すもので、他日屹度見込のある人物だが、如何にも辯舌が鋭利過ぎるので、浪士の奴等に憎まれて居る、夫れが爲め何時不慮の禍災に罹るか知れぬによつて、之を救ふて貰ひたいので預けるのだと云ふ答へた、岡部もソンならばと、逢つて見ると成程龍馬が言ふ通り何となく才智あり氣な人物であるから、岡部も書面を福井に送り、小次郎を更らに横井平四郎(小楠を)に托した、横井も親友からの頼みに快よく承知したはよいが、偶々藩論が一變した結果、横井は中根雪江等と共に斥けられる場合に立致つて、小次郎は遺憾ながら

福井行を中止し、又も龍馬が紹介で幕府の奉行たりし、勝麟太郎(安房を)の許に食客に住込み、彼れが創てた神戸の塾に入つて、一心勉強したさうである。

開が前後に於て面白い話もあつたが、茲には之を省略するとし、元治元年の春、坂本龍馬が督する海援隊に加はつて長崎に赴いた、當時長崎は今の東京の様に、諸藩より遊學に來て居るので、亦實に維新政府の組織研究所とでも言つてよい程であつた、兎角するうちに外國人は遣つて來て、切りに長崎を歐化する、小次郎の陸奥は何うかして海外の事情に通じたいものだと考へた末に或外國宣教師の家に住み込み、彼れに就いて英語を研究したさうである、然かも幾多

の難關をくぐり抜けた陸奥は、其後益々時運を迎へ、維新の風雲は陸奥をして、突如大阪府の權判事たらしめ、これにて始めて流浪的境遇を脱した。

あまただれ程に

戸を叩く

井上角五郎

政治界と實業界と兩天秤をかけて、旨いようにやつて行く腕前の程は、誠に以て感服の外はあるまい、今日の氏が威望勢力は暫らく措き、其今日に至りし半生中の經歷の多趣味さいはふか、果た何さいはふか著者にはさても評し難い、失敗失望幾度かの後、さふく兩天秤の運よくも成功して仕舞つた。

七圓取の教員を廢めて食客に住込む

氏が郷國岡山縣の師範學校を卒業した時は、同じ仲間が十二人あつたが、氏は然かも上席を占めて居た、所が何れも小學校の訓導を拜命する段になると、或者が月俸十一圓で、他の或者が十圓、氏は一番の成績で卒業しながら七圓の月俸辭令が下つた、かふ來ると誰れ

しも不公平としか思はれまい、氏も不平滿々で任地に赴き、恰度七八ヶ月も勤めたが、何うも之れが癢に障はつて堪まらぬ、一層の事一つ東京に行つてもそつと立派な中學教員か、乃至は師範學校の教員となり、キヤツ等を驚かしてやらんものと、憤慨の餘りに出て參つた。

七圓の月俸をよし八ヶ月分九残にした所で七八五十六圓の總額、此内から食料雜費を差引けば何程も残るまい、旅費丈が漸やく間に合ふた丈で、來る早々困乏し、何か旨い職に有り付いて餘暇勉強しようぞ、所々方々雇口を探がしたが、何しろ田舎より出た許りで、東京の地理も分らねば直ぐに結構な口も見當らう道理もなし、己む

なく同國人の小林義直といふ人を探ねて、當分の間同人の宅に食客をする事に定めた、全躰小林は當時帝國大學の助教授を奉職して相應の生活をして居つたが、何分にも小供が多いので、普通の食客では是等の世話許りでもシチ面倒で辛棒が出来ぬ、然かも食客所か小供の守を命令かり、ネンネコヤを唄ひながら彼方此方と背負ひ廻はる辛さ加減、殆んど話になつたものにあらず、氏は此役を濟ますと其隙に近所の共慣義塾に行つて、スベルリングからリートルを稽古し、歸つて來ると又も小供の守をやる、此際とて例の英書は離さぬので、始終立讀みをしたさうである。

蒲團責をされた揚句は焼芋御馳走

其後氏は小林の宅を去つて慶應義塾に入るべく福澤先生の所を尋ねるして自分の心情を訴へ、何うか食客に住み込まして呉れると、懇願致した、此時福澤翁は氏に向つて、お前は何か出来るかとの質問に、漢學は多少出来る積りですと答へた、夫れは面白い、今生憎家庭教師が無くて困つて居た所だによつて、只何にもせずにお前を養ふ譯には行かぬが、幸ひ私の小供に漢學を教へて呉れるならば、お前の願ひ通りにしてやらうとの、流石翁が利益交換談であつた。勿論此方に異論があらうか、直ぐに承知して福澤翁の家に住み込む事が出来た、總して當時の書生境界には社會の制裁が左までに厳しくもない、従つて學事の外は身の責任も軽い故、随分お話にならぬ

悪戯を致した、氏などは其尤も甚だしい仲間、持前の天然痘と才氣と例の毒舌が、イヤモー憎まれるといつたら非常で、或時は同輩生より蒲團攻を喰ひ、向臍を搔つばらるゝなど毎度、御本人一向に平氣の平左には敵も終には呆れ返り、何時か焼芋でも御馳走するようになつたとか、最もあばれ者の代りには記憶力もよく、同生仲間でも氏に及ぶ者はない、自分よりは先輩に對して、却々話負けずであつたには、何れも此奴喰へぬ人間だと評して居た。

或時は罰金或時は艶聞沙汰

氏が福澤翁に知られた因縁に付ては、深き魂膽が伏在して居る、嘗て京橋の木挽町に明治會堂といふものがあつた、これは常に三田門

下の演説場と定まつて居ると、恰度或日の事此處にて演説會を開いた、氏も辯士の一人で、當日は御巡行の事を論じ、萬乗の君を煩はし奉る當局者の責任に及び、猿廻はしとやらを例に引いて、盛んに攻撃の矢を放したが、當時は今より言論も不自由で、場合に依れば不敬罪に問はれるかも知れん、若し左様の事が出来しようものなら塾の面目に關するとして、關係の者始め福澤翁迄が彼れ是れと心配の末、漸やく罰金丈で事済みとなつたさうだが、氏は法廷へ出た時の勇氣さ、余の演説は決して不敬罪とはならぬ、即ちかふいふ旨意であるを切りに辯疏して、さては毒舌もて裁判官に喰て掛るなど、傍聴し居る知己學友の面々、何うかおとなしくして呉れ、ばよいと、

彼が辯ずる度毎にヒヤ／＼するに反して、御本人は一向平氣に構へ居つた、之を耳にせる福澤翁成程不敬な顔附だが、魂膽に却々見所があるといつて、夫れより深く愛したとの話さ。

今一つ食客時代に付て面白い話を紹介しようか、これは余が新聞記者として時の友、佐瀬氏の著當世活人畫に出て居る、曰く福澤翁は氏の才を愛して婿にせようと思つたところ、令嬢は「アンナ人は嫌だわ」と拒絶せられたとか、是れも流傳で眞偽の處は斷言が出来ない、成程戀は思案の外とやらで、蟹甲將軍と綽名さるゝ如き痘瘡面も、見る人より見れば愛嬌者と見らるべく、近所の娘共が相場を狂はした事がある、其福澤邸に住まつた折、下野宇都宮生れの下女

が居つて、如何にもおとなしく容貌も却々よいので、福澤夫婦は井上とは年頃も恰度適當すれば、彼の女を妻に持たしてはこの相談に上つた事もあつたさうだ、然しこれも矢張り不實らしい、雷に氏は下女の偶のみにあらで、とくの昔から懸想せし一個の美人があつた、其美人とは福山藩士倉井某の娘で、嚴父は常に其家に入出致し一方ならぬ厄介となつて居た、夫れが抑も因縁で偕老同穴を契つたとか。

ぬさふらふ

面あてらしく

雪を食ひ

濱野茂

米界に湯島將軍石崎政藏と相並んで、東西兩大關に立てられ、新宿將軍の名は一瞬飛ぶ鳥を落す程の勢力であつたが、近頃は餘り相場にも手を出さず、何さなく世に忘れられた感がある、然し此男何處迄も豪傑で、殊に血氣時代には却々面白い事もやつた幾度かの浮沈のやり抜けた經歷談中、本書の主とする食客の實話を紹介すれば先づコンなものさ。

奉公廻はり八十餘軒と借財二萬八千圓

幼時の腕白といふたら非常なもの、夫れが爲めに兩親は氏を或寺の味噌摺小僧に追ひ遣つたが、忽ち悪戯をしてお拂ひ箱となり、其後は米屋、菓子屋、下駄屋とありとあらゆる家に奉公しては見たもの

何時も辛棒處が悪戯に、主人の方を暇を出す鹽梅式、恰度十二歳より十六歳迄に僅か四年の間に、都合八十餘軒も奉公し廻はつたとは、兩親は愚ろか誰れが聞いても呆れざるを得まい、之れが幼時時代の來歴である。

其後グーツと過ぎて、西南の役も濟み世も穩かになつて來たので、氏は時機を見計らひ處々方々より酒を買込んだが、案の定時ならぬ場合に騰貴したのを幸ひ、残らず賣拂つて驚くべき巨利を博した、元來大膽な男の事故此位の儲けでは満足せぬ、一層乗るか外るか米相場に手を出して見ようと、茲に決心一番大阪の堂島市場に飛び出し、然かも大山を張つて見た、所が計らずも大失敗を來したので。

切角今迄儲けた金は言ふに及ばず、此外に二萬八千圓といふ借財を拵へた、口にはいへど二萬八千圓の大金はそう直ぐに還へせる譯でない、此上は債主に斷つて一時の猶豫を求めの途なしと、一日債主一同を某料理店に招き、馳走をしながら挨拶して曰ふのに濱かふ失敗して見れば今茲に返還す見込みもない、だによつて私は是から東京に参り必らず大儲を致す決心ですが、然し借金を拂はずに此土地を去るのは、誠に以て良心に相濟まぬ話、若し幸ひに私の心中を憐みくだすつて、皆様暫時御猶豫なし呉るゝならば、屹度三年経たぬうちに皆済致します、此儀如何」と勇氣を鼓舞して談じ込んだ、すると債主の面々何れも烟に巻かれて承諾したとか、氏の奇智此一事

に依つて知り得られる、果して氏は放言壯語を實行したか何うか。

無錢の客を泊める親切な旅館

一時の借金逃がれも出来て見れば、氏も心の中で何の位か喜んだか知れない、早速家の道具を賣り拂ひ之を旅費に上京した、新橋に着くと囊中僅かに五十銭しか餘さなんだとの話なれば、賣拂つた道具の價も大概想像が出来る譯、夫れに東京に着いたが何處に行く目算もなければ、別つに親戚知己もなし、人力車にでも乗つて旅館屋にでも泊れど、傍なる車夫を呼び「オイ車やさんお前に一寸頼む事があるけれど、何うだ肯て呉れまいかな」と問はれた車夫は「車旦那お頼みとは何んな事です、私に出来る話なら致しますせう

濱「出来るともく、何でもない事だ、それじゃ話すから必らず行つて呉れ、實は大阪から東京に着いた許りだが、モ一旅費も遣ひ盡して財袋には五十銭しか持ち合せがない、早や時刻も時刻だし、何處ぞ金の才覺せられる迄無銭で投宿させる旅籠屋を心配して呉れんか其代り見當ればよし一町乗らうが五町乗らうがソナ事は關はぬ、此五十銭を車賃にお前に差上げるから」と、車夫も聞いて一時は驚いたもの、自分も東京に來た當時矢張り右の困難に出會つたものと見へ、更らに濱野に向ひ「車旦那お察し申します、手前も左様な苦しい目に遭ふた事もありました、人情は各別なものでお話を聞けば車賃の高い安いには關係しません、兎に角お乗りください」との

挨拶、氏も多少心配ではあるが此急場別に方法もあらう道理なく、其儘車に乗つて車夫の向ふに任せた。車夫も京橋銀座より日本橋通邊をば輓き歩いて見當ら方題旅籠屋に懸合ふたもの、如何で一文無しのを客を泊まらせよう、何れも体にく断つて仕舞う、車夫も困り困まつて懸がて夕刻頃最後に見込を付けし、靈岸島の眞鶴屋といふ旅籠屋に挽き付け、具さに右の事情を主人に告げると、主人も元來仁俠に富み、一風變つて居た男の事とて、車夫の話を聞き終はるや「此これは面白い、世には却々奇妙な男もあるもの、泊る前に旅籠錢を持たぬと断るなど、普通の人が爲る所でない、よし助けてやれ」と快よく承知して呉れたので、濱

野車夫諸共に喜んで、茲に初めて車夫は五十錢の賃錢に有り付ければ、濱野も漸やく晩飯と宿泊とを全ふする事が出来た、恰度これが明治十二年の四月とやらで、此日を以て新生活の初日と定め、是迄持つて居た品は不祥だとして残らず棄て、仕舞つた。

横柄な食客條件提出

暫らくの間眞鶴屋旅館にロハ的投宿を致して居たが、元よりこは本人の希望する所でもあり、其屋の主人谷崎久右衛門にも相談した結果、谷崎と同郷人で新川に酒問屋を開業して居る高井某に書面を送つて、何うか濱野を世話し呉れまいかと頼んだ、高井は別懇の谷崎からの頼みに早速番頭中村昌平を眞鶴屋に遣つて、兎も角旋籠屋を

辭して私の家に移つては何うかと勧めたが却々以て應じない、中村も強めて勧めたので、濱野もそれじや仰の通り食客にもならうが、行く前に一つ頼みがある、先づ行つたら自分を賓客の禮を以て待遇し、三度のお膳には屹度冷たい羹と冷たい飯とを出さぬように、下婢に給仕して貰ひたい、若し之を承知し呉れるならば凡そ一ヶ年間お前方の食客にならうと、流石の番頭聞いて小瀬な奴めと心中腹も立つたが、主人の命令詮方なく、唯々諸々の挨拶をなして濱野を連れて主家に歸つた、思へば大した食客もあるもかのかな。

威ばつた上に資本の融通

暫らく高井の家に厄介の身分になつて居ると、折々其家に山縣源四

郎といふ男が遊びに来るので、何時しか濱野も悪意となつた、山縣は早くも濱野の凡物でない事を見抜いて、濱野に向ひ「山君商業をなさるゝ積りがあるなら、失禮ですが多少の資本をお貸し申しませう」と、口を切つた時、答て曰ふのに「濱君御親切は重々忝ないが、商業は豫め成敗を期すべきものでなし、旨く行けば何よりだが、萬が一失敗したとあらば夫れが爲めに他人の財産を破ふる憂がある、だに依つてマ一借りますまいと挨拶した、そこで山縣も更に「山君の御意見は誠に至當な譯、ソンならば資本を惠與しよう」と、未だ言葉も終るか終らぬうちに彼れ濱野憤然容を改ため、雷聲一番「濱無禮もの乃公を輕蔑するな、如何に落魄れても、他人の惠與を受

けて、立身の資本としはうなぞどの腰拔とは異う」と、怒鳴つて見せたので、山縣も其意氣に驚き且つ敬服し「山君さう立腹して呉れるな、今君に貸さうといへば借りないと答へる、與へるといへば此始末、碌々日を曠くしたならば、何れの日が無資本で商業が出来よう、私は只管君の爲めに計るので、若し後日如何様な事が起らうとも此邊は少しも君の心配を受けない、其處を能く察して一日も早く事業に就いて貰ひたい」と、誠心込めての物語りに、濱野も有情の人間山縣が厚誼に感謝し「濱夫れ程の君が親切を無にするのも道に反するに依つて、かふして資本金を都合してくれろ」と、僅か二三圓の價しかない一個の腐れ時計を抵當として山縣に預け、金二

百圓の融通を受け、之を懐中にして蟻穀町に腕車を走らせ、例の相場を試みると、今度は反對に運が向いて来て、トン／＼拍子に儲け出し、二年経つか経たぬ間に二萬餘圓の大巨利を博した、所で再び故郷雨の宮に歸り、土地始め大阪邊の舊債主を集めて、前約の二萬圓を耳を添へて償還したさうだが、恰度これが彼れ債主と約した滿三年の前一日であつたとは、不思議も不思議。

錢までが

懸草の中に

ぬさふらふ

小學教員から權少屬、檢事、次官、大臣と漕ぎ付けた手腕は威らしいもの、之れも矢張り氏が辛苦經營の效果、明治昭代の難有さは鼻垂らしを相手に、アイウエオを眞面目腐つて教へ居つた氏さへ、人才登用を受けて今日の榮位、宜しく國恩に酬めて然るべしだ。

清浦奎吾

浦和在の百姓家に食客境遇

舊熊本藩からは却々人物を出した、野田男、米田男、安場氏を始め氏も亦其一人である、其幼時に於ける家庭は極々の貧乏で、到底學問をするといふ譯に行かないので、餘義なく學を應じて熊本市の或下駄屋に丁稚奉公をした、兩親の命令で一度は奉公したもの、元

より本意でないから永くは辛棒して居られぬ、折しも明治の三年維新當時の事として政變世變は甚だしいので、氏も密かに此機に乗じて、奮發一番功名をせんものと大決心の末は東京指して出奔した。

勿論境遇が境遇故腰辨當でテク／＼歩るき、二月餘りも費やして東京に着いたが、之れと言ふ知己もなく、流れ／＼て當時埼玉の縣會議長であつた、星野平兵衛の家に轉がり込み、暫ばし食客をするど、星野も氏が境遇を氣の毒に思ひ、地方の有力家と相談し、北足立群小針村字大針いふ所の或百姓家へ食客に住ませた、然し唯遊ばせて置くのも雙方の爲めにならぬといふので、村の若い者を集めて

くだらない書物や算盤なんかを教へて貰ふことを頼んだが、元より目的あつての上京に、永久迄もかふして居られようか、僅か二ヶ月餘りで其處を出奔し、今度は浦和に来てうろついていた上、今の停車場附近に六疊一と間の二階を借受け、其家に寄寓させて貰つた、すると幸にも六十日目あたりで、漸やく北足立群風渡村の小學校で、教員が要るとの話に、今は日々の生活だに困る有様、何でか職業を撰ぶべき、早速同校の教員と化け込み、後生大事と日々村童連に教へ居つた、聞けば名義こそ大助教とかなんとか素張らしいものだが、月給を問へばたつた五圓とは、岩谷天狗の廣告と好一對になるであらう、次いで間もなく浦和に開成學校が出来ると、更らに

其方に廻はされ今度月俸十圓に進み、明治六年には擧げられて埼玉縣出仕となり、とふく法相から今の農相といふ月桂冠を戴く迄に至つた、开が間の苦心は、蓋し尋常の事でないのだ。

かゝりうご

息子に拳を

指南する

犬養毅

大隈伯を以て政治劇憲政本黨座の勸進元と見立てれば、氏は確かに座頭に据るべき地位だ本黨員を統率して或時は政友會に衝り、又或時は政府に抗するなど、其方針謀畧は悉く其腦裡に在る、學識智才並び得て萬事を抜目なく繰る所、流石彼の今日ある所以か、我輩苟に政友會は勿論今の政黨員中、第一等のお伶俐人物と敬服して居る。

何處へ行つても眞平御免

最初上京したのが恰度明治七年で、彼の開成所が出来た迄は誰れしも、例の寺小屋に少し毛の生へた位な塾で勉強したものだ、氏は英學を修めたい志願で出て来たけれど、如何せん國元より學費とい

つて碌に来ず、外に資を得べき途もなし、さて何かよき分別は出ぬものかと切りに思案した結果、漸く浮び出た名案と言ふのは、國に居た頃森田月瀬翁や、犬養松窓の下に漢籍を修めし事もあつて、多少は讀めれば之を手段に漢學の教師をやり、うして生活の緒を繋がう、藝は身を助ける程の不仕合と笑ひたい奴は勝手に笑へともかく決心して先生早速破れ袴に垢染みた衣服、加之にゴツ／＼した肩を怒らし乍ら、朴齒の下駄を足へ引懸け、市中何處となしに「英漢教授」といふ看板を、目當に食客口を探がし歩いた、云ふ迄もなく其處へ入つて一方には漢學を塾生に教へ、代りに英學の稽古しようとの目論見、探し當てたら最後、大如塾主に會つて己れ漢學の大

先生なる旨を吹聴し、付ては貴塾の學生に教授して遣りたい、其代り報酬は要らぬが、君の方では僕に英語を教へて、寄食させて呉れば満足だと、憶面もなく掛合ふたか、何にせ未だ國訛さへ碌に抜けぬ田舎書生が、例の風彩では誰れがさうかと合點しよう、却つて狂人だらう位に誤まられて、所謂敬して遠ざける主義の挨拶、流石の漢學大先生も飛んだ瘡違ひに、愚痴ダラ／＼で住宅に居つて来たとか。

藤田茂吉に知られし發端

其後氏は、湯島の共貫塾義とやらに通つたさうだが、元より學資とでもあらう筈なく、揚句の果は藤田茂吉といふ男の所に行つて、食

つて碌に來ず、外に資を得べき途もなし、さて何かよき分別は出ぬものかと切りに思案した結果、漸く浮び出た名案と言ふのは、國に居た頃森田月瀬翁や、犬養松窓の下に漢籍を修めし事もあつて、多少は讀めれば之を手段に漢學の教師をやり、うして生活の緒を繋かう、藝は身を助ける程の不仕合と笑ひたい奴は勝手に笑へともかく決心して先生早速破れ袴に垢染みた衣服、加之にゴツ／＼した肩を怒らし乍ら、朴齒の下駄を足へ引懸け、市中何處となしに「英漢教授」といふ看板を、目當に食客口を探がし歩いた、云ふ迄もなく其處へ入つて一方には漢學を塾生に教へ、代りに英學の稽古しようとの目論見、探し當てたら最後、大如塾主に會つて己れ漢學の大

先生なる旨を吹聴し、付ては貴塾の學生に教授して遣りたい、其代り報酬は要らぬが、君の方では僕に英語を教へて、寄食させて呉れば満足だと、憶面もなく掛合ふたか、何にせ未だ國訛さへ碌に抜けぬ田舎書生が、例の風彩では誰れがさうかと合點しよう、却つて狂人だらう位に誤まられて、所謂敬して遠ざける主義の挨拶、流石の漢學大先生も飛んだ疝違ひに、愚痴ダラ／＼で住宅に居つて來たとか。

藤田茂吉に知られし發端

其後氏は、湯島の共貫塾とやらに通つたさうだが、元より學資とでもあらう筈なく、揚句の果は藤田茂吉といふ男の所に行つて、食

客にと轉がり込んだ、元來此藤田は豊後佐伯の人で、慶應義塾で漢洋の學を修め、後改進黨を組織して自由黨と犄角を争ふた發頭人、随分世の辛酸を嘗め盡して來た故、犬養の食客に對しても何にかにさなく世話し呉れた、恰度或日の事主人公の藤田は、彼奴は一體は何が出来るのか、試しに一つ文章を作らして見やうと、己が間に呼んで或題を出した、すると犬養は命せらるゝが儘に元の座敷に戻つて、犬「コレは乃公の學力を試験するんだな若しもますます書かうものなら、ヒヨットすると飯の喰ひ上りになるかも知れぬ、これ一奮發せざるまいと、先生向ふ鉢巻になつて筆をオツ取り、忽ちの間に書き上げたので、之を持って藤田の前に差出した時、藤「モ一出來

たのかい、大分早いネー、其所へおいて行き給へ、何れ讀んで見るから」この挨拶、氏は其場を引き下がつて、藤田の答へを待ち居つた。何れ讀んで見るとは挨拶したものゝ、藤田も氣にかゝつて堪まらな、い、先づ手に取つて文章を讀んで見ると、これといふて批評を加へる餘地もないので、藤「成程コリヤ出来るわい」と獨語を漏らしたが、程なく犬養を呼んで、今度は何か時論を尋ねて見た、所が却々旨いことを喋る、藤田も一方ならず犬養の才を愛し、永久迄食客でおくのも本人の爲めにはならぬ、だに依つてかねて自分が關係せし報知新聞社に寄稿させたら、將來何うにかなるだらうと、此旨犬養

にも話した、彼れも喜んで藤田の厄介となり、日々寄稿しては應分の原稿料を受けたのが、抑も新聞記者となりし發端、これからろく其名を世に賣り込んだ譯さ。

たばこまで

細末をのむ

かゝりうど

古河市兵衛

其性來を尋ね來らば、京都在は岡崎村豆腐屋の倅、幾多無數の艱難辛苦を経て、遂には銅山王の名を賣るに至つた、氏が成功の秘訣を問へば、運鈍根の三ださうで、先づ運あるを要し、次で鈍なるべく、更らに根氣を持続せば、期して成功すると輩下に教へたさか、若し夫れ氏が半生中の經歷を知る者、成程さ首肯するに相違なからう。

奥州に叔父を尋ねる因縁

氏が郷里を去つて叔父に當る木村某を、奥州盛岡に尋ねたのは恰度十八歳の時であつた、然かも此歳で何百里といふ遠き叔父の許に迄、行くべき決心を起したのは借ても如何なる動機に依つたものか、是

非共書き立てるの必要もあり、又價値もあるのだ。
前申す通り氏の家は豆腐屋稼業で、氏は毎日父の業を助け居つた、
或時例の如く豆腐を擔いで近村に賣り歩くと、偶々一人の役人体の
者が通り過ぎた其途端に、役人が豆腐箱に打つ突かつたが最後、忽
ち箱は倒さまになる、中なる豆腐は粉微塵に壞されて仕舞つた、流
石の市兵衛黙つて居られようか、役人に向ひ其不都合を責めると、
今日の世なれば職業に依つて理に二つはないけれど、如何せん御維
新前で、まだ役人共が無暗矢鱈に巾を利かせる時代、よし彼れに不
都合があらうとも此方は豆腐屋風性の、理屈も何も通らばこそ反對
に叱り飛ばされ、其儘泣き寢入となつた、此時氏は考るのに、何

うも情けない僅か豆腐の十や十五を壞されたからとて、腹を立つよ
うな事では將來立派な商人になれぬ、又今の境遇に居てはアンナ小
役人め等に叱り飛ばされる、一層の事此様な詰らぬ小商賣を罷めて、
何ぞ將來見込ある事業に志ざして見たいと、茲に奮發心が起りぬ前
説の叔父を尋ねる次第となつた、さあこれからが食客時代。

食客中貸金催促の大功名

豆腐一件の失敗が動機となつて、かねて貯はへおきし金三分二朱を
懐中に、はるく盛岡の叔父を尋ね行つた、此叔父木村は金貸を渡
世として居たので、氏は行くに叔父の業を助け、毎日の如くに借主
の宅を催足し廻はる、元來奇才に富む氏の事とて掛合が甚だ上手な

爲めに、何時も行く先毎に必らず貸金の幾分を取つて来たが、夫れに付て最も面白い話がある。

或時例の如く某家に叔父に代つて督促に行つた、此借主が一方ならぬ悪者で、今日還す明日還すと、彼是と逃口辭を設けて借金辨償を果さない、木村も困り困つて氏に相談すると、古「叔父さんソナ奴なら私が行つて屹度取つて来ませう、何に御心配は要りませぬ」と、突然借主の家を叩き、約束通り是非今日返済して呉れると追れば、借主は又も逃口辭、使の市兵衛由來名物の頑固男、通常ではとても取れぬとかふ思つたか、古「貴方が返済して呉れる迄私も此場を一寸も動きませぬ、何うか待ち草疲れる故お茶を飲ませ、序で

に火鉢を貸して呉れ」と、言樣傍への火鉢と茶器を取り寄せ、グビリ／＼茶を飲みながら暖つて居る平氣さ、借主も其儘打棄て置く、晝過ぎ晩も過ぎ臆がて夜の十一時頃に相成つたが、依然として動きもせず、其うちに空腹にもなり、茶のみでは堪らない、市兵衛之れには閉口して、いよく居間の周圍を食物の探索に取りかゝるとふと吊しあつた昆布を發見したので、之れはびたと許り引下して再び元の場所に戻り、火に焙つてムシャ／＼喰ひ始めた。

夫れとは知らぬ借主、小僧め何を爲て居るかと密に障子の隙間から覗いたら最後、嘗つて、自分が痲氣の妙薬にと陰部に用ゐた昆布をば、御本人殿まさかに知る術もなく、饑へて粗食なしの俗諺通り、

さも旨さうに喰べて居る始末に、流石の借主もお笑くて叶はぬが、耐らへて元の部屋に戻り、妻女に向ひ、圭あの市兵衛小僧には驚いた、今朝から飯を喰はせなかつたので、とふく痲氣に用ゐた昆布を取り外して喰つて居る、此分ではキヤツも明日は愚るか永久迄も動かぬ氣に相違ない、コリヤ所詮返済さに行かぬわいと、翌日早々算段して使の市兵衛に渡した時、氏は借主を省みながら、圭何うです、貴方は私の根氣に敗けましたな、若しも返済さんとあらば、五日十日は何の事、一ヶ月でも二ヶ月でもかうして頑張つて居る積りでしたが」と、棄言葉を殘して叔父の宅に歸つた、すると叔父も昨夕は氏が歸らぬのを一方ならず心配し、債務者の爲めに危難にで

も遇ひやしないか、愈々今朝迄俟つて歸らない節は、自分が尋ねに出掛けようと思つて居る矢先に、圭叔父さんととふくあの男を根氣敗し、約束通りの金を取つて來ました」と、叔父木村が前に差出した、これには叔父も吃驚仰天、暫しの間は賞賛措くなかつたとか、然かも此奇談は甲唱へ乙傳へて、遂には氏は却々奇智に富めるとの評判が盛岡市中に響き渡り、其結果或人の周旋で、鴻池支店に備はるゝ事に定まつた。

飯ばかり

十人前の

あさうらふ

多年法科大學の教授として、國家に貢献したる博士が功績は實に著るしいもの、學識宏博にして何處迄も學者的性格を備ふる所は、先づ以て穩積博士と相並んで、學界の重鎮と仰がれて居る、

富井政章

無一物の留學の食客の苦心

博士が法律志願で東京に出て來たのが明治六七年の頃であつた、此頃は恰度司法省直轄の法律學校があつて、現に今日では古法學者は、何れも前校の出身である、所で入學するに付ても試験が執行する譯で、先生志願者の一人として、之に應じて見るに豈計らんや、落第

と來て仕舞つた、ツイ癩に障る自暴も起る、コンナ事なら一層の事外國へでも吹飛んで、他國の學校でも卒業した上に意趣返しをせんものと、愈々度胸を定めて之れが準備に着手致した。

元來博士の家は京都で、生活も餘り裕かでなかつたものから、東京に來ての學費さへ卒業迄續けるには、少しく至難しい方であつたに、今度は佛國に留學すると來てはとても資金は及ばぬ話、兩親や親戚の者は切りに思ひ止まれと意見したが、博士は何うあつても聞き入れない、揚句の果はお前の勝手にせいと言はれて、一時は當惑したがやつこの事で船賃丈け貰ひ集め、先づ目的の地に着いての上の分別と、次の船を俟つて神戸を出帆し、里昂府に着いた時は懷中將さ

に一文も餘さなんだ、如何に覺悟とは言へ、異郷に在つて肝腎の一文無しあらば、コンナ悲しい事はあるまい、兎も角雇はれ口を探がして糊口を凌がなければと、夫れから町の紳士を誰彼の別なく訪問し、何うか雇つて貰いたい旨を物語つた、如何せん外國人だし殊には初めての事故、雇ひ先も見當らなんだが、最後の某官吏が博士の事情を氣の毒に思ひ、兎も角私の家に來て居るがよからうと親切な言葉に、博士も喜んで更めて當日より同家に住み込む段に定まつた。

講義の盗み聴き當時の奇劇

歐米諸國の學僕などといふものは、日本の學僕とは事變りて、却々

待遇もよければ又働くべき時間もチャンと定まつて居る、其働く時間來れば自分は何をしようとも勝手氣儘、誠に能く規律立つてるのは流石文明國だ、所で博士は某家の厄介となつて指定の業を濟ますと、今度は勉強に取りかゝる、時には往々夜を徹して勉強するのを、何時しか主人の眼に入つたと見ゆ、はるく日本から佛國に迄來て、此くも苦學をしようとは感心な男だと、切りに賞賛し居られたとか。

暫らくの間辛棒すると、世事にも慣れ一通りの用は足せて來た、此上は望みの學校に入學したい、一つ何と答へるか主人に話して願つて見ようと或日親しく右の次第を逐一申述べて、何うか日々の手當

は要らぬによてつ、餘暇學校へ通はして貰ひたいと嘆願に及んだ、主人もかねく博士の熱心勉強するのを知つて居たもの故、直ぐに賛成して先づ大學の豫備校たる某私立學校へ入れて呉れた、たよりなき此地に情ある此主人、本人の喜びは何の位か、一心不亂に勉強したお影で、何うやら大學へ入られる實力が付いたが、如何せん居候の身分であれば、思ふ儘に入る事は叶はず、又修業の時間通りにも行かない、已むなく暇々を偷んでは大學の講堂に忍び入り、密かに机の下に隠れて講義の盗み聴をやつ付けた、最初のうちは発見らぬで済んだもの、何時しか或學生が発見けて、一同總立ちとなり、兎もあれ引出して取調べねばならぬとの喧聲、惘れなる哉博士は机

の下から摘み出された、所が人種が違つて居る、益々怪まれて愈々之れは盜賊に相違ない、夫れとも何用があつて右の始末かと、強ち歐りも縛りもせまいが嚇し文句に、逐一事情を陳べ續いて自分が將來を語つたので、初めて講義盗み聴の一件を明かにした、傍に居た面々は何れも博士が精神を嘆賞して上に、校長始め教授連は協議の結果、斯程の篤學者なれば試験さい合格せば、學校の費用で勉強を許可するとの話、身は何んな制裁をも受けるかと心配し居つたに、案外な挨拶に接したから飛立つ許りの喜び、其翌日入學試験を受け、元より充分の素養を付けてあつた故、難なく合格して、初めて官費入學の恩典を受け、遂に十三年八月に優等を以て大學を卒業し

た、思へば海外での食客の苦學は、實に博士の外はなからう。

か、リリウ。

七十五日

いきのびす

野津道貫

陸軍大將中山縣大山に次いで、名聲を著つて居るが、其膽の座つたので、徳望のある二點に付ては、恐らくは野津大將に及ぶ者はなからう、聞けば部下の大將を恐るゝ鬼神の如く、大將の一言は常に實行されて居るさか、借ても威らゐるものさ。

食客兄弟餅搗と大食で一驚

兄の鎮雄と共に、奈良原繁の家^{いへ}に食客したさうだが、偶々年の暮に當つたので、例に依つて家々何れも餅を搗く、奈良原の家でも同様人を雇ふて搗かせようとするのを、何時しか聞き込んだ野津兄弟は奈良原に向つて、これしきの事は僕等二人で搗いて仕舞ひます、其代りに駄賃として精一ぱい餅を喰はして呉れろとの挨拶、奈良原も

如何で否應申さう、早速兩人に任せると、得たり賢しと赤裸々で揮一つになり、互に掛聲をして大杵を揮ひ、忽ちの間に五六苞の餅を搗き上げたので、流石の主人公も野津兄弟が強方に驚服した。かふなると愈々先約の通りアンコロ餅の御馳走 兩人は空腹で堪まらな、切りに女中を説いて餅を要求する、主人公の奈良原は笑ひながら奥の室から出て来て、際「何うだい約束通り餅を喰べてもよいが、何の位喰べられるか試めし見い」と、話もまだ終らぬうちに、彼等兩人は合點したと許りに、お膳に座つて喰べ始めたが、恰かも鯨の水を飲み、大蛇の物を食ふ如く、忽ちの間に何れ三四人前の分量を喰ひ盡し、尙は足らぬような顔をして居たので二度吃驚、心筋かに彼れ二人は

軍人となつたら、必らず大將の材だと評して居たさうだが、然かも豫言通り兄鎮雄は陸軍中將となり、西南戦争で偉勳を立て、弟の道貫は陸軍大將伯爵の肩書を得て、今回の大戦争には第三軍に司令長官として、名を海外に轟かして居る。

居候むしの居ごこの
いゝなごこの

田中常德

郵船會社の調度船客課長として、却々巾を利かして居る。一寸見た所では如何にも頑固者らしく思はれるが、何うして人は見かけによらぬもの、酒も飲めば煙草も喫む、園藝も、俳句も謡曲も音藝も、ありとあらゆる道樂の間屋様、然かも能く眞面目くさつて事務を執つて居るのは、矢張夫れ小壯時代の苦心した結果が、兎あれ同社中の名代男さ。

英人の學僕を廢めて稻葉家に寄食す

氏の家は京都の淀で、代々淀藩士族風を吹かせたが、生憎貧乏生活をしたので、充分に學業を修得する事は出来な、何處なりと飛び出せば旨い事にもブチ當るであらうと、かふ考へて出掛けたのが兵

庫縣下、其意氣に於ては壯なるも、年齢がまた十四歳と來ては使ひ所もなし、已むなく小學教師と化け込んだが、前途希望を有つて居る身が小學教師では益々世の進歩に遅れる許り、豫ねてから自分は英語を研究したい精神あつたので、其翌年神戸市内に英學塾を開いて居た某英人に懸合ひ、學僕となつて其餘暇切りに語學を研究致した。

暫らくの間は辛棒したもの、何分とも面白くもなく又前途の希望を達するに遠い、一層東京に上つて一苦勞したなら、或は出世の出来んものでもあるまい、まゝよ何うならうと上京したのが明治十七年の春、手に充分の職あるだに初めて東京に來た際は、却々以て糊

口の途を求むるに難澁する、況してや高が知れ切つて書生ツボの、
ろう誰れも心配はして呉れぬ、據るなく舊知事稲葉邸に尋ね行き
現在の境遇と將來の目的を物語り、是非とも食客において貰ひたい
旨を頼むと、稲葉も書生仲間の有様も承知し、且氏が決心の程を賞
賛して、夫れでは兎も角家へ来て居るがよいとの挨拶、永の炎天續
きに雨を得た農夫の如く、喜んで同家の厄介となり、漸やく三度の
食に有り付いたが、只生活で通るのみなれば強ち東京に来て苦む迄
にも及ばぬ譯、此上は何處か學校へと稲葉にも相續した、すると夫
れは結構だといふので、諸所の學校規則を取り寄せいよく三田の
慶應義塾へ通學することに定つた、そこで毎日塾に行つては勉強し

歸つて來ると小供の守をしながら英語の稽古にはイヤハヤ一方なら
ぬ苦心を嘗め盡したさうである。

放逐が却つて成功の原因

暫らくの間稲葉夫婦の機嫌を取り、學校へ通はせて貰つて居たが、
或事情の爲めに稲葉の邸を出なければならぬ始末に相成つた、此詳
細は本人も秘して著者に語らぬが、風聞によれば或日主人公と議論
の衝突を初めた、元來肯かぬ氣の田中も折々友人などと議論をして
容易に譲らない、今にも鐵拳を交へるような劔幕に立至つた事が度
々であつた、コンナ譯で恐らくは稲葉との關係も断たねばならぬ次
第になつたのであらう、氏も「出て行け」と言はれて見ると、夫れ

でも許しておいて呉れよと頭を下げる譯にも行かず、況して氣象が氣象故前後の考へもなく、とうとう稲葉家の食客を辭して仕舞つた、さあかふ破裂すると慶應義塾にも通はれぬ道理で、暫らくは無宿浪人の姿とはなつたのである。

世に棄てる神あれば助くる神ありとは、眞に夫れ當れる俗諺で、當人一時は威張つて稲葉の出たもの、知己朋友を尋ね歩き、食客口を探がしたが今直ぐには見當りさうもない、これにはトン十閉口して居ると、一日朋友が氏の下宿にやつて来て、三菱商業學校に行く氣はないか、何でも或時間は學校の用をすれば、後は生徒となつて學問が出来るからといふた、此話を耳にした氏は目下の境遇三食だ

に困る次第、何うか心配をと頼んだ、朋友もソンのれば相談して見ようと、其折同校の教頭兼學監をして居た豊川良平に面會し、氏の身上を逐一物語り、學校に寄食させて傍ら學問をさせて呉れまいかと頼み込んだすると、豊川も早速承知したので、翌日氏を連れて木挽町なる同校に参り、學僕事務員教師とかふ兼帯の役を勤め、傍ら生徒となつて勉強した、ろもこれがお影で遂には岩崎彌太郎の拔擢を受け、三菱商船會社に入つたのが明治十七年の春であつた、茲に於てか氏は食客時代を脱し、一人前の月給取りとはなり得たのだ。

佐藤進

由來此佐藤家には繼續に付いて、面白い家憲らしきものがある、何でも跡相續人は他より秀才を迎へて、其者にさせるといふ風になつて居る、順天堂の創立者佐藤泰然は、松本順や林董などの倅を有ちながら、之を排して他人の子を貰ひ受け跡を繼がせたのが後に大博士とせられた尙中先生で其尙中先生も實子があるに今の進博士を養子とした、詰り泰然の主意は、我業を續けて世を益し、之を後世に傳へて我道の爲を謀るには、よし他人の子だからとて最も衆人に勝れる者を選んで續がせればならぬさかふ言つて居られたさか、頗る卓見な次第ではないか、さすれば博士が尙中先生の鑑識を受けたのも、又茲に存してゐるのだ。

博士の將來と母の苦心

博士が佐藤家の養子とするに付ての前幕は、誠に以て面白い筋合に

なつて居る、實家は常陸の太田町で、家は代々酒造を業とせられたが、普通なれば相續人でもあるし、矢張り其業を覺ゆるするのが一般商家の慣ひ、所が博士は幼時から學問の方が嗜きで、十四五歳の頃には早や四書五經の素讀をば終り、史記左傳文選などを讀んで居た、兩親も博士が商業の方に身を入れずに、始終讀書劍術に熱中して居る所から、親類中にも物議が起つた、中にも某叔父の如きは、アンナ事をされておいては一家の興廢にも關係する、だによつて學問はスツバリ廢めさせて、一日も早く相當の商家に奉公にやる方が、將來佐藤家の爲めになると、主張したので、何れも夫れに旗風が向いて來た、獨り此間に立つて最も心を痛めたのは、取りも直さず

博士の母であつた。

此の母と言ふのが、女性に似合はぬ高尚な思想と氣概があつて、
の教育に付ても始終之に注意し、寧ろ抑制することをせないで却つ
て陰に助長した、前般の親類協議に於ても、よし多くの者がそう
定めたにせよ、果して夫れが本人の性質に適つて居るか何うかもま
だ知れぬ先に親權で強制するのは無益な話、常に博士に向つても汝
が好む業に就け、併し屹度世人より尊敬を受けるような人間になら
なければいかぬと、心に掛けて意見した、ソんならば悴の將來問題
を何う決したかといふに、母方も頻りに苦心し、悴を何業に就かせ
た方が宜しいかと、朝な夕なる心配した結果、何うも旨い考は起

らぬ故、一つ易斷に依つて博士が一身の方向を定めようと、其頃水
戸に祇園寺といふ寺があつて、此寺の住僧は却々易斷に精しいとの
風説も高かつたので、餘程遠方よりも頼みに来る始末に、母も兎も
あれ此處へ行つて一つ見て貰ふべく、家内や親類の者には極々内證
で、太田町より水戸の祇園寺に住僧を尋ねた、其際頼む口上は、只
十五歳の男子の身上を易斷して戴きたい云つた丈で、詳しく悴の身
上は語らなんだ、住僧は委細承知したと直ぐに易斷したさうだが、
間もなく一片の半切に何か書いたものを母の前に示し、斯ような易
の卦が出ましたと、勿体さうに大躰の趣意を説かれた。

醫學に志した魂膽話

俗に云ふ當るも當らぬも八卦、所が流石評判ある丈に誠によく的中した。眞此十五歳の男子の身上は、今の所暗いところに向つて居ります。後には明るくなる、そこで、何事も急いではいけません。必ず仕損する故兎角急ずに時期をお待ちなさい、そうすれば屹度思ふ通りに行きます、殊に此男子の一身の方向はと申せば、官に就くがよい、其うちでも醫道は別して適して居る易が出ました」と、聞いて母は成程と深く首肯し、右書付を貰つて厚く禮を陳べ、歸室して博士にも兄弟親類にも示して、既に易の表もかふであり、本人の性行より見ても到底商人の見込はない、其見込のない者に商人になれど云つたとして成功する譯にも行かず、却つて相續させて家の興廢に

も關係するから、跡相續は姉に譲り易の通りに従ふ方がよからうと、切りに説明した結果は一同もとふく、母の意見に同意する事となつたのである。 借いよく醫學を修める相續に一決したもの、當時の事故醫學校の設けあるでなし、到底今日の如く充分に修業は叶はぬ、然るを幸ひ下總の佐倉藩醫に、佐藤舜海といふ有名な醫者があつて此人は前言ふ通り後には尙中と改め、大博士の稱號を取りし程の學者で、殊に博士の家とは姻戚に當つて居る、即ち舜海の妻は博士が母の妹故詰り博士の叔母に相當する、當時は佐藤舜海と云ふたら殆んど全國にも其名が聞えたので、諸國より醫學修業の爲に舜海の許に集まつ

て呉る、早く申せば何十人となき門下が今の學校寄宿舎見たように
何れも佐藤の邸内に寄食し、親しく舜海の薫陶を受けて居る、中
は學資持參で来る者もあれば、全く佐藤家の厄介になつて一切の資
を出して貰ひ居る者もあり、夫れは、ひ非常ににぎやかなもの、博
士の母も差當り好師匠も考へ付かぬので、何にせ佐倉の佐藤に頼
んで修業させようと、佐倉に宛て委細の書面を送つた、すると佐藤か
らの返事には、商家の忤にソナナ變り物が出来たとは珍らしい譯だ、
ドンナ少年が様子を一寸見たいによつて、兎に角私の處へよこし
て呉れとの話に、母は或日の事博士を連れて佐倉へ赴かれたさうで
ある。

佐藤の家に食客末は養子

間もなく佐藤の宅に着くと、驚くまいものか彼所此方より患者が玄
關の前に山を爲して居る、奥に入ると是れまた多くの塾生が稽古し
つゝあるのを見て、博士は心中非常に喜んだ、廳がて母と共に舜海
に會うと、舜海は兩人に向つて、十五歳では直ぐに醫學を修めな
いで、二三年間は漢學を修めるがよい、何れ西洋の書物を翻譯するに
しても、漢學の素養が充分でなければ困る、夫れ故私の言ふ通り
にせよとの意見に、博士も母も成程と之に従ひていよく佐藤宅の
食客となり他の塾生の仲間入を致した。
此時佐倉に續徳太郎といふ儒者があつて、舜海の父泰然時代より

意にして居たのを幸ひ、續に依頼して博士を毎日通はせた、師とする事約三ヶ年博士が十八歳の時、漢學を廢めて更らに和蘭の文典を習ひ、次いで醫學の豫科に移り、夫れより本科にと順を追ふて高等な學科を修めたが、舜海は元來嚴格な家庭で、多くの塾生は何れも我子の如く取扱ひ、決して誰彼のへだてはない、博士も舜海の許に一方ならぬ苦學を重ねたのである。

殊に其時分は今日とは事違ひ、既に醫學校だに無い位故、肝腎の醫書だに乏しいのも道理、原書を買ふ丈の資力ある者は、何うなりと工風して買求めては研究し得られたようなもの、中には全く資力がない爲めに、他の友人から借りて之れを寫し、そうして讀んだ始末

であつた、博士も相當の家には生れ且つ叔父の舜海の家に厄介になつては居れど、前申す通り萬事に嚴格で、勝手な事を爲る譯に行かず、只書物丈は及ぶ丈都合し貰つたので、折々江戸に来て買ふて歸つた、當時江戸は日本橋の本町邊に、長崎屋と呼ぶ本屋があつて、年に三四度位づゝ和蘭陀より原書が來ると、佐藤の塾へも夫れゝ通知がある、一同は右の話を聞くと喜んで江戸にやつて來る、佐倉と江戸までは凡そ十三里もある處を、下駄を穿く者もあれば草鞋がけの者もあり、連中打揃つて買ひに來たさうだが、今日の學生と反對で、皆な腰には握飯をブラ下げ、テク／＼歩るきで用を足して歸る健氣さ、其の艱難辛苦の程を想像し得られる、かふして一心不亂

に醫道いどうを修おさめて居ると、舜海しゆんかいも博士はかせが秀才しゆさいを見抜みぬいて、遂ついには改あらためて
自分じぶんの養子ようしとしたとか。

あん燈あんどうの

せなかなつかふ

居いさふらふ

辻 敬 之

大日本圖書會社の委員となり書籍商組合の副頭取として、東京書籍商仲間に多少は
其名を知られて居るが、借夫れ迄になる氏が壯時時代の苦心は、決して尋常の事では
なかつた、殊に上京後の食客當時の逸歴、却々以て面白い。

向むかふ見みずの計畫けいかく先まきから外はられ

男子だんし志こころざしを立たて、郷關きやうかんを出いづの詩しを吟ぎんじつ、意氣揚いきやう々東京とうきやうに上のぼつたのが明治五年、別に學資がくしのあるでなければ早速さつそく同縣どうけん熊本くまもとなる、
津田信弘つたのぶひろといふ人の家に寄食きしよくした、すると姻戚いんせきの林正明はやしせいめいが米國べいこくから
歸朝きちやうした話を聞き込んだので、或日あるひ林はやしを訪とふて將來せうらいの方向ほうかうを相談さうだん致いた

した、此時林は氏に向つて今後社會に立つ人間は何うしても政治經濟の學を修めるがよい、お前も是非修めるはと切りに勸めて呉れた折も折林は夫等の外國書を翻譯最中であつたものから、若し私の勧めに従ふものならば、家へ来て飯を食ふて、傍ら手傳をとの親切に挨拶に、氏も喜んで林の食客とはなつた。所が何うも面白くない、何時しか同じ食客の佐俟某と密かに林の家を逃げ出し、長野縣に行つた、夫れは外でもない、佐俟の舊藩士水野侯に嘆願し、學資を共々出して貰ふとの旨い約束が、そうは問屋で卸さぬもの、越中禪の夫れならで向ふからきれいに断はれ、兩人失望落膽忽ち糊口に窮し、所々に流浪しては漸やく衣食を辨じ

居つた、借其後は何うなつたか。

詫も叶ふて元の家に食客

次の幕はかふである、別に爲すべき方法も盡きたので、再び東京に舞ひ戻り前の林が家にコロガリ込んで、重々前非を謝して見ると、林も強ち他人でもなければまさかに関はぬ譯にも行かず、二言三言の叱責で難なく其場は納まり、以前の如く同家に寄食するを得たとか。曩の失敗に凝り凝りした氏は、今度は眞面目に辛棒し居つたので、林もこれならばと島田重禮先生の塾に入學させた、元より奇才もあり、熱心する質故一心不覺に勉強したのがそも出世の端緒、之れか

ら着々世の中に名を出し始めた。

雪隠で

齒をみがいてる

居さふらふ

菊地武夫

近頃は大分法學が進歩して來たので、博士さしての氏は確かに夫れ丈の價値あるか何うかは、我輩敢て保證は出來兼ねるが、其德望に於ては恐らくは氏の右に出づる者はあるまい、氏が法學院大學に長として、英吉利法律學校時代より幾多の後進を薰陶指導し。各方面に人才を出した功績は偉大なるものだ、若し夫れ弘き意味に於て國家が勳功を表彰するにあらば、此の如きは眞先であらう

舊藩南部伯邸に寄食中の數々

先代は仙助と呼び舊南部侯の家臣で、目付役から町奉行に昇り、又用人役などを兼ね居つた、そこで悴の氏は、幼時より天性豁達穎悟といふ方で、元治元年恰度十一歳の折藩の儒者江幡五郎に漢學を

修めた、所が間もなく成辰の戦が始まつたので、江幡は奥州別藩の牛耳を執り、其の門下生をば四方に派して、遊説を試みさせたが如何せん士風一變して學事を顧みる者も無く、何れも干戈を執て武事を講ずる鹽梅式で、氏も己むを得ず策を收めて一先家に歸つた。此時藩には小豆隊なんといふものが組織され、氏も其組に加はつて練兵の稽古をしたもの、其の後戦局は進んで幕兵も官軍に敗れ、王政維新と成つて見れば、モ一士では遣つて行けない、早くも此の邊に氣が注いだ氏は明治二年十五歳の折、決心一番東京にと上つた。勿論上京は學問を修めて、他日大に爲すの目的にあつた譯で、最

初は兩親も上京を許さなんだが、堅志容易に動かすべきも見ぬのを見抜き、夫れならば勝手に行けとの挨拶、旅費とても貰はれる道理もなし、未だ世なれざる初の旅途、加之に肝腎の旅費とても無いといふ始末、イヤモ一名状し得ざる程の苦心を重ねて、やつこの事で東京に着いた。さあ此上は何うして糊口を凌いだらよからう、これが勉強し事より先に立つ、氏はコンナ時こそ藩邸に行つて頼むに限る、藩邸で若し世話をして呉れぬとあれば、他に方法を考へても遅くない、とかう度胸を定めて麻布なる南部邸に押掛け、事の次第を逐一物語つた、目付役の谷といふ男が大さう氣の毒に思ひ、早速南部侯に言上に及

んだ、すると候も一方ならず賞賛し、食客に置いても苦しむないと
いふ事であつた、谷も主候が快よく聞き届けてくれたのを喜んで、
其日から同邸に住み込み、英磨殿の近侍を命じられ、餘暇には熱心
勉強致すと、偶々英磨殿の歸國する段になり、氏も之に従つて郷里
に歸る始末に、心中困つたわい、何ぞが旨い東京に止まる工風はあ
るまいかと考へたが、主候の命令辭し難く、途中で歸國し矢張り同
家に使へながら、日夜讀書に眼を曝し居つたとは、如何に志操の堅
忍でありしか。

三年藩侯は氏の精神を見抜き、學費を給して出京遊學を許した、
此時の嬉しさは何の位のものか、旅装も匆匆上京して先づ伊藤庄之
助の門に入り、後大學南校に入つたのが抑も氏の今日ある所以だ。

大雪や

おれも人の子

ぬさふらふ

江崎禮二

撮影の術畫像の技、東の大關を丸木利陽とすれば西の大關はまさに江崎、其名都門に噴々たるものさ、然し此頃は金も出来て居たので、今度は名譽が欲しくなりて来た見え、大分市の名譽職などで奔走して居るが、兎角政治的關係する者は財産を減すことが多い、流石は商人根性の此邊にかけて抜目もあらうか、種を確かませてやつて居る所、江崎の江崎たる手腕が、先づ以て市中名物男の一人に加へられるのは何處迄も難有い世の中

叔父の許に寄食中の出来事

昔から近江商人と云へば、却々商賈に抜目がなく、必らず亦成功するものゝ如くなつて居る、實にや近江商人のやり方は關東の人間と

違ふ點がある、其隣り國は美濃、原見郡江崎村は氏の郷里だ、して見ると何となく隣國の氣風を受け易い、例令ば東京の人間は外觀の美に做ひ易く、自然怠惰者が出来る勘定で、其又隣國の埼玉や千葉の人間は自然東京の風に化すことが早い道理、コンナ譯で氏も何時しか近江商人の氣風に感化し無一物より遂に今日の如き成功者とはなつた、殊に其困難時他を紹介すれば、諸君も定めて首肯する所かあらう。

幼時には誰れしも同じ郷賢に入つて學問したが、家も百姓ではあるし、殊に裕かな暮しを致して居らぬ爲めに、叔父鹽谷宇平の家に食客となり、切りに理學を修めたとか、其理學が嗜きたといふのは詰

り父の性を受けたもので、元來父の兵左衛門は文武の素養もあるし
就中算術が上手な爲めに、折々藩命を帯びて堤防の新築や、河
の改鑿などの諸工事起算方を精査したことがあつた、氏も所謂親に
似た子の諺に背かず、幼時より理學が嗜きでもあり上手でもあつた
後年寫眞術に志ざしたのも、此邊に原因したであらう、夫れは暫ら
く預り、恰度十八歳迄叔父の許で厄介となり、一心不亂に勉強し居
ると何時しか野心も出た、何うも此片田舎では思ふような譯に行か
ぬ、一層東京に上つて一苦學せんものと、或日叔父の宇平に懇願し
た所が忽ち相成らぬと叱り飛ばされた、之れには抗辯も出来難いの
で、心中只困つたものと嘆息し居る矢先に、偶々村内の久世治作と

いふ男が曾て米國に渡航して、大分金も儲け學問も覺えて歸つて來
たのを、聞き込んだから耐らぬ、早速彼れが家に駆け付けて米國の
實況談を問ふては、此上もなき喜びとし居つた、よせばよいのに久
世は寫眞の話を出した揚句、自から寫し鹽梅なんかを驗めしに見せ
たので、氏も教へて貰ふては夫れのみ熱中し、心竊かに寫眞師で
身を立てようとの考を起したのである。

食客中貰つた金は悉く貯蓄

話は代つて食客とはいへ叔父の家、監督も嚴重で多少は氏の將來を
思つて居る所へ、本人は前申す通りな次第、腹を立つまいものかッ
ンナ事を廢めて眞面目な業に就け、夫れども道樂がしたいなら何處

へでも行くよといとは、叔父は叔父丈の意見を、本人も寫眞術の研究を道樂とは何事か、野蠻極まる叔父めと心中ではかゝ癪に障はつても、口に出したら夫れつきりな話、況してや厄介の身小であれば我慢に我慢して叔父の許に寄食し居つた。

當時下岡蓮状といふ男が横濱で寫眞業を開き、同地に愚らか田舎迄にも知れ涉つたこれを聞いた氏は即座に横濱に行きたくて叶ばないそこで叔父に相談すると何で許さう 再び叱責を受けて終まつた、氏は不愉快で堪まらぬ、其結果は決心して内々上京の準備を致すと恰度藩の大參事小野崎藏男が、官命を以て東京に上るといふ譯で、氏は先づ藩士の高橋辰五郎が紹介を得て、小野崎の從者となり、と

ふく東京に着いたのが明治三年の十月 例に依つて小野崎の家に厄介になつて居た。

暫らくの間は食客の身の、只ボンヤリ然と遊んで居たものゝ、夫れでは肝腎の目的に着手する事が出来ぬ、よしするとせよ幾分かの金が必要なので、此當時は小野崎も小遣として毎月一兩、そして假りの住りなれば三度の食事は悉く辨當屋から取り寄せた氏は外に得る途もなければ、切りに儉約して毎月の小遣は之を貯蓄し、三度の辨當は毎日一本を減じて、开が一本分の代金は芝西久保なる、明石屋佐吉といふ者に預けをいた、詰り此の貯金で一事業を企てる資本に、充てる考へであつたのも、其頃出入する厄介仲間聞き込んで

江崎は實にケチな奴だ、アンナ者には將來何んで事業が成功するものかなぞと、誹謗して止まなんだが、御本人一向無頓着、今に見てろと云はぬ許り、夫れに當時高官の士が交りを他藩の人と求めるには、必らず遊廓に上る風習が行はれて居つた、此際自分の從者には一處に連れて行く譯に參らず、又スツバ抜かれても困るによつて、云は、口留めの賄賂として、お前等これで何か買つて喰べると一兩の金を呉れたものが、小野崎も折々右の交際をする故氏も一兩の賄賂に往々有り付かれる、貰うた金は一々貯蓄して少しも贅費しない然かも積り積つて二十圓餘りになつたので、其頃柳川春三が著はした寫眞術獨習と、器械藥品附屬道具を買入れ、日夜實地の研究に餘

念がなかつたとは、何と思操の堅忍な事であつたらう。

横濱に行つて寫眞屋に厄介

彼程の熱心は暫時の間に、景色や人物を寫せるようになった、氏も心中何の位嬉しいか知れる、此上は永久迄食客をして居る必要もなし、一日も早く事情を打明けて小野崎の家を辭し、横濱の下岡蓮狀が門に入つて、専ら技術の稽古をしようとして、或日逐一目的の程を物語つた、すると小野崎も流石分かつた男と見ゆ、お前が將來の爲めになるものなら、一時も早く行くがよいといつて、加之に何程かの慰勞金迄も呉れ、うして横濱行を送る親切に、氏も感喜一層奮發心を起したとはさもあらう。

當時下岡方には數人の門生も居つて、普通なればモ一門生希望者を謝絶すべき筈だに、氏が幾度となき懇願と素人寫にも多少は心得があつたもの故、やツとの事で厄介となり得られた、氏が熱誠氏が勤勉は忽ち主人の氣に入つて、一方ならず愛遇し、僅に二年間でスツカリ技術を覚え込んだのは何處迄も天才の然らしむる所か、其年の十月暇を取りて又もや東京に戻り、かねて彼れ是れと世話を受けた明石屋佐吉を訪づれ、これ迄の身の經歷を物語ると、佐吉も氏が平常の精神を見抜いて居たので、直ぐ様百八十圓といふ大枚を融通して呉れた、此金こそ氏が芝宇田川町の同郷人、武藏屋松吉の二階を借り受け、寫眞業を開いた發端、イヤモ一、非常な苦心を嘗めて、

遂には今日の大寫眞師となり上げた魂膽は、拙著「明治富豪致富時代」に事明瞭なれば、宜しく夫れを讀んで貰ひたい。

か、りうご
何をするにも
手暗り

田中 壤

人の將來は分らぬもので、時運は往々其意思目的を變更せしむるも奇妙、氏の如きは確かに其一人か、今北海道造林會社長となる迄の魂膽を採つて見れば、先づ以てコナナものである

畫家の家を喰ひ廻はる

氏は舊出石藩士田中岳月の二子で、恰度明治六年の六月東京に出て一勉強せんものと決心奮起やつて來たのが東海道五十三次、漸やく目的の地に着いたがさて寄るべき當もなし、夫れに自分は畫が嗜きであつた故、將來は立派な畫家になつて名を得ようと、これが开も

氏をして上京を企だてしめた動機である、然るを着後旨い入り口も無い所から、何でも此上は畫家の宅をブツ付かり方題に尋ね行き身の始末を述べて食客に住込まうと、其翌日より始めた、すると、川端玉章が氏の希望を容れて、當分の間來て居つても苦しからずとの話、喜んで同家に食客となり始んど二三年間稽古を致した。

理髮屋の小僧が一人前の男になるにも、短かくて七年長きは十年の年期奉公をせねば、職人となつて飯を食ふことは出来ぬとか、畫家に於ても猶更らの事で、氏が食客に住み込んだ當時は、ホンの筆の持ち方、墨の配合位から始めて、二三年も経たねば初歩を教へて呉れぬもの、成功を急ぐのは若い者に有り勝な譯で、氏も何となく詰

らぬ氣も起り、取り分け日本書よりは洋書が修めたくなつて来た、如何に良帥を得たとして身に適せぬ以上は成功も覺束なしと、斷然川端の食客を辭し、今度は洋畫家高橋由一といふ人の食客とはなつた何處に參らうとも食客は食客、茲にて暫らくは辛苦を嘗めた、すると偶々懇意にした内務省地理局長、櫻井勉の家に或日の事尋ねると、櫻井は氏に向つて、何うだ西ヶ原地理局樹木試験場へ入つて勉強してはその勧めに、夫れも面白いととふく之れに仲間入して、林業を修めたさうで、氏が今日の地位を得る迄の變遷も又實に奇といふべからる。

高木與兵衛

奇蹟精心丹を發賣してより、弘く世間に名を知られた、思へば氏も却々機敏な男さ、然し其今日の如き立派な商人になるのも、詰りは少壯時代の苦心の結果で、決して尋常の方法で成功した譯でない、試みに困乏當時の有様を遠慮なく書き立てやう

秀才に感じて飯炊役の更代

生地は下總の上埴生郡地川村字八板といふ所で、父は治兵衛其の四男であるといふ、何うならうと將來は自分の勝手、家を相續するの何のといふ心配なきに任せ、御本人殿考がへた、如何に明智秀才があればとて學問の力が無ければとても萬事は出来ぬ、此上は師匠を求めて勉強しよう、決心したのは臧らしい話だが、はてさて家も

百姓で加之に四男平に迄も學資を興へる程の餘裕があらばこゝろ、先づ第一學資がゼロと来て居るので、第一に食客口を探がし、其餘暇で修められる方法を、切りに氣を揉でた矢先に、同郡の立木村に高橋喜惣治とか呼ぶ老人があつて、此老人は學者でもあり、却々慈善深い人だによつて、此所に尋ねて頼んでは何うかと話して呉れる者があつた、氏はハタと手を拍ちこれは旨い、よしうんならば直ぐ様行つて見ようと、突如自家を飛出した。漸やくの事で高橋老人が宅を尋ねあて、親しく老人に面會して右の次第を陳情すると、一寸見受ける所如何にも奇才あり氣な人物でもあり、遠方から尋ねて此くも弟子になりたいとは感心な奴だ、其許

の頼を承知したとの挨拶に、氏の喜びは天にも登る心ち、然し食客をする以上は是れくの用をも命せられたのが老人の飯炊奴、當人も此位の勞働は覺悟の上故、毎日飯炊をやつては其餘暇に勉強致した、元來風俗に超越て居た氏の一を聞いて十を知る有様に老人も一方ならず感服し、飯炊を他の門弟に交代させ、氏には何にも關はず勉強せいと我子の如く寵愛致した。

師の諫言に決心上京す

所が若い時は思慮淺薄勝なもので、コンナ結構な生活にありながら何時しか風潮に襲はれた、といふのは外でもない、其頃村内に劍術を教ゆる男があつて、戸々の若者何れも皆な擊劍の稽古に、之を見

た高木も、組入が爲たくなり、老人が目を掠めてはお面お胴を始め
た、さあ今度は學業の方が勢の疎かになつて参り、暇さいあれば鑿
劍の稽古、肝腎の學問は全くソツチ除けとはなつて仕舞つた、最初
のうちは老人も大目に見ておいたが、只で學問をさせて居る其難有
さも忘れて、此の始末となりては黙つて居られぬ、一日氏を一問に
呼びつけ大聲一番「老」お前が昨今の舉動は實に怪しからんではない
か、肝腎の學問を廢めて劍道を修めると以の外、如何に無分別とは
云へ時勞を知らぬ馬鹿者めが、かね／＼お前にも言聽かせ、お前も
將來の目的を明かに申して居るじやないか、世の中は日毎に開くる
に従ひ、劍道などで暮して行けるか、一日も早く良心に立返り、最

初の目的を遂げる考を持たぬ事なら、今日限り私の家に寄居さ
する譯に行かぬ」と、今にも鐵拳を見舞はれん許りの立腹、御本人
の高木も恩人が熱誠込めての諫言に、忽ち其場で改心の意を表し、
重々不心得を謝した上、やつこの事で放逐丈は免がれたとは至笑千
萬。
其後相も變らず高橋老人の薰陶を受け居つたが、永久迄居ても田舎
は田舎、老人も切りに江戸に出て相應の商家に見習ひたりとするが、
得策だと勧め呉れたので、氏も決心して江戸に上つた、然し今日の
書生見た程でもあるまいが、學問上りの如何にも商家の丁稚には不
向で、折角よい口が見當つても不適當として先方より斷はられる、或

日の事知人の周旋で奉公人とも付かず、又食客とも付かず、マ一商業見習ひといふような名義で、日本橋の薬商岡野伊平方へ住み込み毎日家業を勤めて居ると、主人も殊の外寵愛した、其後何とも付かずに入つたきりで、さふく十四年間の辛棒、多少の貯金も出来、商業の實務も覺悟たのが氏の後日薬商となつて、世に賣り出す發端とは成つたのである。

か、りうど

芋虫ほどの

腹を立て

西郷隆盛

蘆に拙著「陸海軍十四將」に於て、西郷以前西郷無し、西郷以後又更らに西郷無しと断言したが、此断言こそ余が一生一代で、當分の間は彼が如き人物も現はれざるべく、断言も保證が付けられさうに思はれる、見よ彼が藤田東湖の後を繼いで尊王論を主張し、次いで討幕論をば主唱して實行したかと思へば、續いて東方論の先鞭者となつた、悲むべし彼れば城山に最後を遂げたが、死後二十餘年の今日に於て、彼の主義精神の大部は眞に實行されつゝあるのは、決して疑ふにも及ぶまい、ならう事なら當時彼れが意見を實行させたならば、朝鮮は恐ろかな事、滿洲全土さては西比利亞迄も、遠の昔我日本の領地となつて居つたかも知れない。

初對面にて東湖の家で小間物見世

大西郷が藤田東湖の門に食客した事に付て、面白い逸話を紹介しよ

う、國元にあつて西郷吉之助と云つた頃、東湖の名を聞き非常に喜
ひ居つた、それも無理のない話、當時學者には鹽谷岩陰、藤森弘庵、
安井息軒などの人物も見ゆたが、其名望は東湖には及ばず、また佐
久間象山の如きは只兵學者として知れた許り故、されば書生の時務
を聞かうと思ふ者は、何れも東湖の門を叩いて、其説を聞くのを樂
みと致した、所が吉之助江戸に上り、有村俊齊が兼ねて東湖と懇意
にした所から、一日俊齊及び津田山三郎と一處に、小石川の水戸邸
で東湖に面會すると、如何にも見上げた人物故一層慕しくなつて、
其後只一人東湖の宅に尋ね行き、何うか師匠になつて貰ひたいと頼
んだ、東湖も兼ねく聞き及んで居る事とて、喜んで迎へ酒を薦め

たが、吉之助元來か酒を嗜かない、最初は辭はつたけれど強ての勸
めに、とふく四五杯を傾けると、下戸の悲しさ忽ち酩酊で顔は火
の如く、胸元が苦しくて耐まらぬ、其結果は例の小間物見世を廣げ
て仕舞つた、其うちに女中が來たのを見て「四「オイ之を片付けろ」
との獨斷命令に、何方が客だか主人だか分らない、東湖此有様を見
ながら頓着する色もなく、盃を手にし「東「なか」面白男だぞ、
然かも其の飾りない所が俺れの氣に入つた」と、獨り喜んで猶ほも數
盃をあほり、意氣益々盛んであつた、其後東湖は西郷に語つて「東「他
日俺が志を繼ぐ者は御身である」と、何呉れとなく語り聞かせた
とか。

座敷立廻はりに門生の冷汗

これより東湖の知遇を受けて、親しく薫陶を受けたが、殊に食客に入つた當時といふたら、何にもかにも無頓着、入浴もせなければ梳らないこと殆んど五六ヶ月餘りで、面や衣服は垢を以て充たされて居る、けれども本人は一向構はぬ、始終沈黙を守つて一言せぬので、他の門弟共は西郷を見て馬鹿者と嘲笑したとか、知らず俗物の眼からはさうとすら見ぬなかつたであらう。
流石鑑識に富める師匠の東湖、決して尋常の男にあらぬ事を知つて、一々西郷の舉動に注意せられた、恰度或日の事東湖が名剣を購つて來ると、之をば多くの門生に見せた、すると何れも皆袖で刀剣を握

り、刀身を支へては授受甚だ慎んだ後、嘆賞して止まなかつたのに、獨り西郷は垢手で白柄を握り、喜びくさつて室内を奮ひ廻はるること數回、丁度閃電の如くに思はれた、イヤハヤ其刀で柱に斬り付けるやら、刀柄も汚ない痕を付けるやらで、門生共は飛んだ事を仕出來すものと、何れ恐るゝ坐つて居るのに、御本人の西郷少しも意に介さぬを見取つた東湖は、何の位氣に入つたものやら、威らいゝと賞賛したので、門弟の面々互に顔見合せて、暫し言葉も出なかつたさうである、思へば其無遠慮さ、これが西郷の西郷たる所以さ。

添田壽一

現時經濟學者中の寶ツ子、經濟さいへば何でもかでも、添田でなければならぬように思はれて居るのも、畢竟彼れの實力さ天才の然らしむる如、他人の金で大學から外國留學迄もやり通し、一度官階に身を投じては、一種獨得の遊泳術を以て巧みに上下を壓伏し、さふく大藏省の監督局長から次官迄漕付け、更らに臺灣興業行總裁の地位を得た手腕は、將來確かに大臣の材であらうよ。

書家を廢めて上京第一回目的食客

博士が幼時を探つて見ると、福岡縣は廣渡といふ所の百姓の倅、神童と呼ばれる程奇才があり、其上筆跡のよい事は非常であつた、近村の者共寄るとさゝると、添田の家では栗の木に西瓜が實つたと評

し合つたとか、夫れも道理で土百姓の倅に世間稀なる天才が生れたもの故、此くも噂された譯さ、昔しから嗜きこそ物の上手なれで、先生暇さへあれば筆オツ取り、切りに習字の稽古に餘念がない、僅か九歳か十歳の頃に自から筑紫山濤と號を命け、親爺に伴れられて京坂地方を揮毫し歩いた、所が或日の事務かに思ふのに、何うも書家などを致して居たのでは、將來立派な人間になれる見込もなし、夫れよりほ之を廢めて東京に上り、一勉強した方がよからうと早くも此邊に氣が注いたのは卓見、否な恐ろしや恰度十一歳の時であつたとは、誰れしもコンナ小供で、よくもマー其智恵か出たであらうと、喫驚せぬ人はあるまい。

程もなく東京に着いた、何が借て幼少の身とて父も彼れ是れと身を案じ、郷里の者に頼んで東京の知己に世話を頼んだ、然し當人は膽が太い、國を出る際から、東京で困れば例の揮毫で糊口を凌ぐといふ腕に覺ゆがある故に平氣の平左、最初は所々方々に行つて食客口を頼んだが、小供のせいかな何處でも断はる、忽ち糊口に困つた、否な一晚や二晩位は知己の家に宿泊しても呉れるものゝ、永久迄もと言ふ次第にも行かぬので、本人もいざ元の書家稼ぎをと思つて居る矢先に氏の才を見抜いて助けたは之れぞ官階に名を賣つた、曩の會計検査院長渡邊昇であつたのだ。

他人の力で遂に成功

世に棄てる神ばれあ助ける神もありで、氏は早くも彼れ渡邊に救はれて暫しの間は玄關番、暇々に讀書に耽ると、或日の事渡邊は氏を親しく居間に呼んで字を書かせた、話通り却々の能筆に、今度は本を讀ませると之れも讀める、其後は種々の話を聞かせ四五日も經つて質問致した、詰り渡邊は氏の記憶力を試験した所が、驚くまいものかストラくと答へて少しも殘した點はない、流石の渡邊もハタと手を拍ち、渡「これはく威らい小僧が舞ひ込んで來たわい、今より學問させようものなら、將來は立派な人間になるに間違ひなし、此上は本人の望む業を授けてやらう」と、獨語を漏らし居たが、其夜親しく氏に希望を語らせ、茲に初めて外國語學校にて入學する段に

至つたのである。

所が此渡邊は非常に八釜やの間屋で、一寸した事でも一々並べ立て、叱り飛ばす、奇才の氏は彼れが性質を能くも呑み込んだので、かうすれば喜びかふすれば腹を立つといふ、方法を辨へたのは鬼に金棒、氏がすること爲すこと常に渡邊の氣に叶ふのも可笑しい位、主人公本人は夫れとは知らず、切りに氏の行爲を譽めそやして、何處へ行くにも添田、なにをするにも添田で、添田でなければならぬ有様殆んど我子同様に愛遇して呉れたとか、彼れ好連兒は渡邊の恩恵で外國語學校を卒業すると、間もなく大學豫備門に入り、次いで大阪専門學校に移つた、然し其間の學費は渡邊の外に出して呉れる人

も聞いては居るが、多分は渡邊の力を假りたさうで、其後は東京大學校に入つて政治經濟學を専攻したが、氏の秀才は舊藩主黒田長博侯の耳に入り、我藩内からかゝる人物ありとは頼母い譯だによつて今より後は我邸に引取り一切を心配して呉れるとの事であつた、氏も喜んで同邸に引取られ毎日學校に通學したとは、コンナ境遇は或は夫れ高等食客とでもいはふか、右のお影で明治十七年には大學を卒業し、續いて氏は今の貴族院副議長黒田長成侯と共に、英國はケンブリッジ大學に遊學し、後獨逸のハイデルベルヒ大學に遊び、二十年業を卒へて歸朝したが、詰り此學資は舊藩主が仕送りして呉れた譯である。

星

亨

明治の昭代に、政治界に立つて歴史上の人物と唱へられるは伊藤博文侯と星亨の二人のみであらう、侯は今尚ほ健全だが、之に反して彼れ星は、兇漢伊庭の兇手に倒れた、其政治家と政黨の主領として、殊に適當せし人物であつた、彼れが克く政黨に猛進し、間斷なく奮闘を試み、彼れが唯一の目的たる黨派的生活の前途に向つて、一刻も休止せなんだ勇氣に驚かざるを得ない、若し夫れ彼れ今十年も生存して居つたならば、如何に偉大なる事業を企てであらうか、我輩は今に幾度か彼れが死を道想して痛嘆に堪へぬ。

最初は醫家に次は幕臣某に食客

氏が生地は朽木だと云ひ、新潟だと云ひ、紀州神奈川なぞといふ者もあつて、所謂十人十色とは此事だがソソならば、實父はと聞けば

星

矢張り桐様種々雑多の噂がある、一説には昔牛込薬店邊に住まつてた左官屋より、連れ子して出た女があつて、浦賀邊をさまよつた末東京に参り、町醫星碩順の後添となられた、此時の連子が即ち後に星亨といふ威らしい人間になつたとの事も、風聞の一に加へられてある、何れにせよ王侯將相何ぞ種あらんやで、素性の低い丈夫れたけ名譽は高い譯さ。

ろこで養父の碩順は一廉の讀書家でもあり、我子の教育には多少意を用ひた、追つて成年に達せば、跡を繼がせんもの、かねて知合なる横濱の醫師渡邊方に學僕に入れた、學僕と云へば書生よりは一段下れる方で、まだ薬局の事や何かは分らない、毎日薬箱を擔いで

追ひ使はれ、家に居れば拭掃除などを致した、其うちに段々家事向の用も辨せられ、薬の名も覺ゆ込んだので、擧げられて藥劑の方に廻はされた、何を申すも十四五歳にしかならぬ事として、藥局勤務が非常に彼れの地位を高めた譯で、内心喜んで居たが、長ずるに従ひ町醫者位では將來なつた所で面白くもなし、又希望に合はぬといつて、とふく其處を飛び出して東京にやつて来た、すると時しも幕末の際して、世間も何となく騒がしくなつたに付け、コ奴は學問なごを爲て居られぬ、亂世には武技を修めるの必要があると、先づ幕臣小泉某の食客となり、此男の紹介で後開成所の世話心得を命せられた、借これからは愈々氏が一本立で世に立ちし始めさ。

光村彌兵衛

維新以來時機に乗じ、徒手空拳一攫萬金の奇利を博し、刹那に猗頓の富を致した高才逸足の士は澤山あるが、何れも富後の産に安んじ、門戸を高く張り庭園を盛んに別荘妾宅を構へ、或時は酒色賭博を算するの外、毫も公益の爲めに一事を爲さず一錢をも費さぬといふのが今日彼等の實狀らしい、然るを之に反して彼れ光村氏の如き、其成功後に於ける、能く慈善德行巨萬の財を抛ち、業を廢めては俗塵を脱して禪林に入るなど、其心事の高潔なる、余は未だ嘗つて此種の實業家を耳にせぬ、蓋し近來は一層私慾に奔る實業家のみで、眞に國家を憂ふる的の實業家を見受けないのは、聊か痛嘆に堪へぬ譯さ。

悪戯をされて主家を逃げ出す

氏が生地山口縣熊毛郡光井村を飛び出し、遂に名聲を賣るに至る迄

の艱難辛苦の程は、到底數十頁を以て書き盡し切れぬ所、茲には最も簡短に寄食困乏の時代を、紹介する事と致さう、頃は嘉永六年の六月であつたか、郷里を出て大阪に赴かうと決心し、途中尼崎を経て某旅館に泊つた、すると隣室に五六人の客が泊り居つたが、一人の客は當時米艦が浦賀に投錨して、幕府に開港通商を迫つて、若し幕府が許さぬとあれば必らず戦さが起るに相違ない、飛んだ事が持上つたものだと話したのを聞き込んだ光村、何米艦提督彼理が来たとな、かふなれば乃公の功名をなすべき時期だ、好機會逃がせぬものよと、翌朝早々同地を出發して江戸に向つた、今日とは事變り汽車汽船の便も無ければ、例に依つて東海道五十三次を徒歩旅行

殆んど四十日許りも費やして品川に着くと、早や米艦に去つて終つた踪であつたのに、失望落膽爲す所もなく、悵然と江戸に行つた、永の旅に囊底餘す所僅かに天保錢四枚、目的もなく日本橋邊を徘徊すると、突然氏を顧る人がある、何となく雙方で識つたかの如く思はれるので、立留まつて諦視にたら、何ぞ計らん從弟の入江新二郎といふ者であつた。そこで氏は從弟に向ひ「光、ヤ、久し振りであつたナ、兎も角お前の住居を案内して呉れ」と、連れられて彼れが住居する芝は毛利家の邸内に赴き、夫れから久保町の酒樓に行つて互に身上の話を交つたが、從弟入江は氏に向つて「イヤ、モ、都會生活は却々困難だに

依つて、歸郷した方が得策でせう、決して悪い事は申さぬ故お歸りなされるがよい、何に旅費の所は私は心配致します」と、彼是れ勸告して見たけれども肯き入れぬのみか、氏は慨然來歴を述べ、一成功した後でなければ再び生きて國へ歸る精神はないと、深く決意を示したので、從弟も、氏が夫れ程堅い決心なら及ぶ限り盡力をしよう、早速川崎屋某の家を訪ひ、何處なりと氏を周旋して貰ひたい伺を頼んだ、某も一寸會ふた許りで、光村は尋常の男と違つて居る事を看破し、快よく承知して米倉丹後守の歩卒に世話した、歩卒と云へば如何にも軍人らしく思はれるが、今日の軍隊組織とは雲泥の差で、小遣もすれば護衛もする、別に之れといふ職の無い者はソ

ンナ事でもさせて、三度の飯を喰はせ幾分かの小遣を呉れて得た、或日の事丹後守が登城致して幕府に謁見する際、氏は從僕となつて城内に在つた、居合せた從僕は何れも君侯の出られるのを俟つて居ると、偶々一從僕が穴談に煙草の火殻を氏が袖の中に投じた爲めに忽ち煙が燃上つたから溜まらない、何れも疾呼して誰れか禁を犯して煙草を喫つたか、犯した者は命が無いぞと言ひはやす騒ぎに、何しろ火元が氏の袖の中故非常に愕き、且何人かの悪戯だと辯疏したものの、其儘其處に居られまい、直ぐ様逃げ出して漸やく嚴罰丈は免れた、先づ其足で丹後守の邸外に行き、夕暮を待つて知己を頼み、邸の主役を経て事の次第を陳情し、尙ほ此邸に止まつて居れば、累

を我主に及ぼすことを懼れるに依つて、早速お暇を戴きたい、何うかこれ迄の不都合は寛恕して呉れると詫入つて、何れにか姿を匿くしたかと、思へば其忠實、眞摯の情入をして無かし感涙に咽ばせたであらう。

醫家を辭して沖商の家に轉がり込む

食客の從卒も罷めて見れば、更らに行くべき見當てもなし、己ひなく茲に川崎屋に參つて右の事情を物語つて、全々氏に罪なき事故某も氣の毒に思ふて、再び或醫者の許へ食客に世話した、暫らくの間茲で辛棒しはしたものの、此時世間も騒々しく、志士は切りに鎖港攘夷を唱へる始末に、血氣壯りの氏も醫者の食客も眞面目にして居

られぬ、間もなく暇を取つて今度は長崎藩の卒伍と化け込み、いざ事起らば先鋒隊で殊功を立てんものと、意氣寔に天を衝くの勢力であつた。

處が幕府の議も中途で立消となり、諸藩でも出兵を見合せたので、何んの事だ面白くもない、コンナ譯なら罷めて終まうと、忽ち卒伍を脱して今度は餅菓子屋を築地本願寺傍に出した、兎角するうちに伊豆の下田港は市場となり、貿易が盛んに行はれると聞き、一層其處へ行つて旨い仕事に有り付かふと、テク／＼箱根驛迄足を運んだ時は、モ一懐中には鏢一文の持合せもなくなつた、腹は空つたが飯を喰ふ事も出來ず、折から道連れの小川常七といふ男と一處に、

伊豆の内浦に赴き、其地の富豪大川四郎左衛門の家に尋ね行き、當分の間大川宅の食客で其日を無事に送られたが、永久迄遊ばせて喰はしおく人のあらう道理もなし、自分もそう安閑として居られぬので、夫れから處々方々を経廻り、揚句の果は横濱に舞戻つたとか。来て見ると既に外交も始めて開け、歐米の船艦は横濱に集まり、土地の商人は切りに外人と物貨を取引する、俗に此商人を沖商と申して却々巨利を博した者もあつた、處が當時其筋では嚴格なる規則を設けて、苟くも外艦に貨物を取引する商人は、先づ貨目分量をば書して官の許可を経た旗印を立て、そして往來せんければならぬ事と定まつた、そこで一々其筋に出す文案を認める、今日より見れば誰

れにも出来るが、如何せん其時分の事故沖商中には眼に一丁字のない奴許りで、一々之を届けるにも非常に困つたのを見て、エ奴旨い所に出會つた、よし乃公が代書をしてやらうと言ひ様、沖商吉藏といふ者の家に尋ねて右の次第を打ち談し、文案を作つて如何にも勿体げに読み聴かせた、成程氏は筆蹟も上手だし、夫れに如何にも走筆の妙を得て居つたので、吉藏め見て驚いた上に、一方ならず喜んで何うか用が無ければ、暫時の間私の家に來て呉れるとの話、思はず氏も糊口を凌がれたとは、世に助けぬ神もないものである、然かも氏は食客として特別の待遇を受け居つたが、一ヶ月の後改めて沖商吉藏方の書記となり、月何程の給料を受ける段になつた、氏が

一生の立脚は即ち茲で、是れからは多少の貯財を以て、獨立營業を爲すといふ其後の話は、追つて別著に紹介致さう。

か、リリウご

隣りへ腹を

立てに行き

中村彌六

由來信州の山中からは人物を出す、實業家としては天下の系平、今村清之助、小野光景、北村英一郎の如き、政治家としては渡邊國武兄弟、此外各方面の偉才を出して居る、蓋し氏も亦其一人に數へられて居る、彼は林學博士といふ肩書を得て、實業の方面に驥足を延ばすかと思へば、更らに政黨者仲間に幅を利かして、兎や角と云はれてゐるのは、聊か彼れが才物たるを證し得られる、遂此頃は何をい密々巧み居るか、トント世人に忘れられつゝある。

食客中出教師の内職

恰度十五歳の折迄は郷里高遠藩の藩費、進徳館に通つて居たけれども、ちと生意氣の風が吹いて來たので、此山間には引込んで居る事は出來ない、一層都會に出て盛雪の功を積んで見ようと、或日の事

兩親に物語つた所が、父元起も藩費の教師ではあるし、相當の眼識を有つて居たので、早速之を承諾して呉れたが、當時は家計も極赤貧の方で、到底兩親より學資を受けて勉強するような旨い譯に行かぬ境遇、出立の旅費も算段せねばならぬ有様に、母親も僅か許りの金を拵へ、氏は之を貰つていよく東京に上つた、これが恰度明治二年の春。

無事に東京へ着いた、例によつて中島某の食客となり、餘暇には安井仲平や田口文藏などいふ人の許に通つて勉強した傍ら獨逸語の稽古をした、其頃は今日と違ひ外國語の出来る者とてもなし、あつた所でホンの數ふる位で、例令學資の充分な者でも思ふ通り修められ

ぬに、況して書物とても買ふに難澁する始末、食客ではとても資金も貰へる筈もなければ、此上は夜分になつて商家の弟子に讀書算術の出教師をして、何程かの月謝を取り、これで自分の學資に充てんものと、早速初めると、運よくも一人二人と弟子が殖て來て、仕舞

には三十人餘も出來漸やく學資を補ひ得られた。兎角するうちに明治五年の春を迎へた、偶々大學南校が開かれたと聞いて、早速之に這入り先づ鑛山學を研究したが、學資とても誰れ一人助けたのでなければ、従前通りの手段を以て資金を得ては、毎日通學する其間の辛苦は、決して今日の書生輩には夢想だも及ばざる所さ、彼れが堅忍克己はとよく明治九年に南校を卒業し、

茲に初めて一人前の男とはなつた、殊には卒業の成績も好かつた爲めに、其後外國語學校の教師に採用され、續いて大阪師範學校長と迄榮轉した、俗物なれば學校長位で先も止まるが、此の男却々満足が出来ぬと見えて、又もや餘暇に實業經濟學を修めつゝ、是非一度外國に留學したいとの考を起した、夫れも無理ならぬ話で當時同年輩の秀才共は何れも洋行熱にウカされ、我先に洋行を企てた。氏も幾度か行かふ行くまいで、切りに心を痛めた末、遂には行くべく決心し、忽ち官職を抛つて家財は残らず賣り拂ひ、此金を旅費に横濱へ赴き、今や船便の出發を待ち構へると、計らずも家に病人が出来たから、是非とも歸京せよとの使者に接した、チエイー厄介な

事よ、だが乃公は早や家門を出て既に此の始末なのに、今になつて何事が起らうとも歸る筈に參らぬ、後とは宜しくお前方に頼むぞと言ひ棄て、其儘使者を追ひ返し、米國を経て獨逸に行く迄の上等切符を求め段になつた、所が其行を送つた知友の一人が、途を印度洋に取つたなら旅費も安上りだし、旁々便宜ではあるまいかと注意をしたけれども肯き入ればこそ、此行は固より背水の陣だ、有つて居る千圓内外の金よし節約したとて何うならう、乃公は其難い方から先にする答へて、意氣壯々出帆の途に就いたとか。

意外な手段で意外な待遇

應がて目指せる伯林の都に着いた時は、案の定懷中無一物の姿で、

今にも飢餓に迫らん程の境遇であるが、毫も屈する氣色なく、切りに寄食すべき職を探がした、すると素遜の某富豪が門を叩いた折、談話の末は日本の圍碁將棋などの事に及ぶと、氏はコンナ遊戯を知つて居た故、コ奴説いて彼れ富豪に稽古させよう、さすれば飯丈は有り付けられると、早くも彼れ等が様子を見抜いたので、氏は切りに日本遊戯の高尙優美を説き聞かせ、時には眼前に實行して借貴殿も稽古なすつてはと勧めた、某富豪も非常に面白く感じたを見て氏に向ひ、是非とも教へて貰ひたい、其代り私の家に宿泊つて居ても宜しいとの頼み、此方が豫算通りに箱まつたのは、何處迄も氏の頼智に敬服せざるを得ない。

藝は身を助くとやらの俚諺通り、氏は飛んでもない遊戯で富豪の食客となられ、又其上に多少の學資迄も貰ひ得て、同地の森林専門學校に入學する事が出来た、これは元より某が仁俠の故でもあるが、五日や十日の寄食は兎もあれ、永い間寄食して學校に迄も入學するの資を興へられたのは、詰り氏が勤勉熱心の有様が某を深く感じさせた結果で、當時は朝も鶏鳴に先つて起き、夜半になつて寢に就く鹽梅式、實に一方ならぬ苦學を重ねたとは、氏の親しく知友に物語つた所である、然し此一事が何時となく日本政府に分つた爲め、政府は其志を嘉みして、特に大藏省の御用掛に拔擢し、改めて官費留學を命じたさうである。

佐々木政吉

醫學博士中の古顔、内科専門の杏雲堂病院長で知られて居るが、天才は恐ろしきもの、素寒貧の家に生れた氏か途に今日の如き地位を得るに至つた開が云はれ因縁を見るに如何にも小説的らしい、今其次第はコンナものさ。

俺の忤が醫者になれるか

本郷の方からお茶の水橋を渡つて、神田小川町方向に行かれる諸君は、必らず左側に煉瓦塀で取り圍んだ、嚴めしき邸を見受けらるであらう、其門標には筆太に佐々木東洋、佐々木政吉の標札、申す迄もなく東洋は養父で、政吉は養子の博士である、其初め氏は本所花町といふ現に木賃宿を以て有名な、淋しい所に生れて、本姓は田中イ

ヤハヤお話にもならぬ貧乏暮しであつたが、近代の豪傑星亨性來の夫れならで、勞働人足の忤にも似合はず却々の學問嗜き、少しの隙だにあれば讀書手習の稽古、兩親も日々の生計には苦しむもの、餘りに忤が學問嗜きに已むなく近所の塾に通はして居つた、所が元來天稟の才物、立所に多くの兒童を凌駕し、屢々師匠から褒美を貰つたとか。

前申す通り其日暮しの貧乏生活、他外の小供のようにそう永久迄も學問もさせられない、親爺も切りに家業を勧め、毎日何程なりと稼いで生計を助けて呉れねば困まると、勸告したけれども肯き入ればこそ、或日氏は兩親に向ひ 政私が今からお父さんに従いて、彼

様な仕事をして居ると、將來お父さん位の人間しかなれませんまい、私には立派な目的があります、即ち醫者となつて天晴れ名を世間に賣る積り、今兩親に孝行せぬのは相濟まぬが、何うか私の心中をお察しなすつて、暫しの間名醫の所へ門弟に遣つて貰ひたいのです」と、此話を聞いた親爺はせゝら笑ひ「父何んだと馬鹿を云ふな、貴様は氣でも狂つたか、おれつちの忤が醫者になれるか、なれないか、夫れころ眞實に檜の木に西瓜か南瓜が實るようなもの、雲を掴むような考はスツカリ思ひ切つて、明日からお父さんと一所に働くがよい」と、幾度もなく勧めたが、何うあつても承知せぬ揚句の果は或る傳手を求め、時の名醫佐々木東洋の許に門弟に住み込ん

だ。

東洋先生の食客後は養子

門弟といへば如何にもよく聞るが、詰りは食客の事で、行つた當時は玄關番から拭掃除、其前後には薬局の下使ひ、何うして一通りの苦みでない、暇々には主人公の東洋先生に乞うて醫書を借受け、熱心に首つ引をして居る、流石奇才ある丈に何事にも拔目なく、殊には忠實である所よりして、東洋夫婦は勿論、高弟共にも一方ならずも寵愛された。

恰度或日の事、東洋先生門弟等を集めて、種々の講義を聴かせる、其後は月何回と定めて講義をなし、偶には是迄教へた所を代るく

門弟等に答へさせると、驚くべし後の鳥は先になる俗諺に違はず、氏は講義を受けた分は残らずスラ〜と答へるのみか、何時の間に如何なる書物を讀んだものか、「かふいふ學説もあります」などと、折々奇警な言を吐くので、東洋先生二度吃驚、此男こそ將來は立派な醫者になれると心算かに喜んで居た、遂には開が因縁となつて、氏は東洋先生の養子に貰はれ、初めて本式の研究をする事になつたさうである。

ぬさふらふ

一ツ巴に

ころり腰る

正木照藏

郵船會社員中文才と敏腕を以て、聲望衆を抜いて居る、其始めは學校教師、夫れから縣會書記や新聞記者、地方議員など種々雜多遷變の多趣味なる生涯を経て、遂に實業界に身を沈めた氏が來歴談を聞かば、却々後進者の戒めともなるが、茲には本著の目的とする食客時代のみを、紹介することに致すで御座る。

初めは欣喜後は失望

氏嘗つて郷里淡路を飛び出し、兵庫縣廳の雇を奉職した事があつた尤も其前一度大坂にも行き、英學塾などに入つて勉強もしたので、何處迄も書生氣質は抜けない、糊口の爲めの給料も取りたいが借學問もしたい、何うかしてよい考へも出まいものかと切りに思案し居

る所へ、折も折音楽に名ある田中正年といふ人が、大學をば卒業して給料も月六七十圓は取れるようにもなり、偶々歸國せし砌りふと氏に出遭ふた正「よい所で遭ふた、ナニニ貴方も大學を卒業なすつたとな、夫れはマー羨ましい譯です、實は自分もコンナ事を勤めて居るが、心では勉強したくて耐まらないのです、といつて學資もなし困つて居ます譯で」と、切りに身の不遇を嘆じて居た、すると田中は氏に向ひ「旦那君夫れ程の精神なら一層私と一處に東京に行つては何うかね、私も幸ひ月給の六七十圓は取るし、別に生活に困らねば君の一人位来て喰つた處で何でもない如何ですか」と、いと親切な話に、氏も夫れならばと身仕度も早々、田中に連れられて上京

を企てた。
行く先は今更ら著者が申迄もなく分り切つて居る田中の家で、此處にて暫時食客となり、パーレー萬國史などを修め居た、其うちに田中も他に轉職せねばならぬ始末に、氏も東京に止まる事が出来兼て、まだ一年も経つか経たぬに歸國した、去りとて家には両親も家財もなく、其日から生計に窮する譯で、何とか致して相當の職を心當りを探したが、運の悪い時は却々見當らぬもの、已むを得ず阿部興人を尋ねて何ぞ使ふて呉れると頼み込んだ、此時阿部は徳島縣の縣會議長をやつて、大分幅を利かして居る、すると阿部も何れ縣會も開ければ其時は書記になりと使つてやらう、夫れ迄待つてはと

の挨拶、此方は敢て待てぬではないが、只其間生計維持の方法さへ立て、貰へばと談じ込んだ、阿部もかふ言はれて見れば、縣會議長の身分として書生一匹を養ふ事が叶はぬと、弱音を吐く譯にも行かず、ソンなら其間は私の家に來て居るがよいといふ話で、とふく阿部を口説落し氏は再度の食客時代を踏んだ。

半食客半職の境遇は何時

やがて縣會も開かれる段になつて、氏も阿部が盡力で書記に出たもの、勉強したいが山々故一寸も辛棒して居られぬも道理、又も其所を去つて神戸に赴き、乾行義塾に入つて英學を修めた、此際とて勿論學資も有たねば、同塾の學僕をして居つたけれど、少々塾の都合

で之を廢める始末になり、據なく兵庫縣の縣會書記に雇はれ、得た給料で勉強したさうである。

氏が志願とした英學の研究は付ては、當時同地の英國領事館に友人が居つて、此人の盡力で氏は館員に日本語を教へ、氏は其代りに英語を教はつた、此分なら大分出來るようにならうと喜んだ間もなく領事は横在濱勤を命せられ、いよく其方へ引移る場合に立至り、氏も共々横濱に來つて領事館内に寄食した、だが公然雇ひ入れた次第もなければ、給料とても充分に貰はれぬので、何か他に資金を得る方法をと案じてた矢先、横濱で有名な豪商西村喜三郎の家族が英語の出稽古を頼みたいとの事で、知人から氏に行く氣はないかと

の話、夫れはモツケの幸ひと直ぐ様承諾致して西村家に行き、毎日英語の教師をやつた、普通なれば一ヶ月に五圓か三圓、高くも七圓内外だのに、西村は思の外親切な男で殊に氏の境遇を知つてか恩惠的に一ヶ月十五圓といふ報酬を呉れたとか、以上は即ち食客時代、是れより神戸の商業會議所書記長や報知新聞の主筆に聘せられついで今の郵船會社に入る迄の辛苦談は、兎も角一人前になりて後の事であれば、茲には省略するとしてしよう。

あさふらふ

拳を敷へて

叱られる

白石直治

器宇宏濶、磊々少しも小事に關らない、然かも果斷英邁、機を視徹を察して人を用ゆること手指を動かすか如き手腕は、先づ氏に於て初め見るであらう、曩に大學に教授の職を執られたが、議論の正確と辯舌の爽快は、頗る學生の敬慕する所となつた。理學博士中には珍らしい男と立てられたのも、又全く無理ならぬ話さ。

激奮上京後藤伯を口説く

氏の嚴父は久家種平と言つて、儒者を以て土佐の藩中に知られて居た、十三歳の折に藩費致道館とやらに入つて漢籍を修めたが、此當時氏の兩親は折々氏に向つてかふいふ話を爲て聞かせた。父「直や能くお聞きよ、お前の叔父の作太郎(中島信行)はナ、却々の慷慨家で

王事には切りに心を痛めて居た、其爲めに十九歳の時藩を脱けて長州に赴き、同地の志士に交つたが、人間が威らくもあるので、仲間の者には非常に尊敬された、お前も何うかアーいふ人間になつて呉れ」と、誠心込めての戒言に、氏も之れに激發されたと思へ、とふく明治三年に志を決して、はるく遠き東都にやつて来た。いざ来たもの、別に學資を送られる譯でもなければ、之れといつて身を世話して呉れる人も定まつてない、何處へ行つて厄介にならうかと考へた末は、誰れしも同じ人焼の、同藩の先輩たる時の參議、後藤象次郎を尋ねて、食客に置いて貰はふと、先方が承知しようがせまいが一向に無頓着、既に成れるもの、如く心得、直ちに後

藤邸へ押しかけて食客住の談判を開いた、後藤もさるもの、合ふて話を交へると言ふ所甚だ奇抜なので、忽ち氣に入つたと見え、後「ソナラ自邸へ來てるがよい」と、茲に漸やく三度の飯にあり付く事が出来たが、飯を食ふ丈なら態々東京迄出て來る馬鹿もない、何でも今一つ後藤の親爺を説いて、邸の事に何にもせんで毎日毎晩學問のみさせて貰ふのが得策と、今度は夫人の方を旨く説き落とし、詰り後藤迄も旨くやつて一切後藤の費用で洋學を修めたのは、何處迄も押の強い話さ。所が時しも維新騒擾の後を受けて、士風唯尙武といふ傾き、少くも文事を談する者があれば、一概に柔弱取るに足らずとして排斥さ

れ、思慮の浅い輩は之を耻づるような有様であつたが、此邊にかけては流石卓見、何に俗物共が知つて居る事か今に見ると、云はぬ許りで一心學事に熱中したのを、何時しか後藤が耳に入つて、氏が將來を見込んで居た、すると明治八年に開城校が設けられたのを幸ひ、引續き後藤が力で同校に入り、とふく同校を卒へると諸君も御存の如く、數年の後東京大學と改まり、學制の改正に連れ工學部を卒業して、初めて工學士の稱號を得た、これから後は氏が獨立經營の時代、只不思議にも試業中數十回の試験に、一回でも首席を他に譲らなんだとは、氏が學才の程を窺ふに難くあるまい。

後藤恕作

明治新進の實業家として、氏の如きは確かに其數に漏れざる人物、明治二十年に品川在は大崎村に後藤毛織物製造所を設立し、幾多經濟上の困難を闘ふた、氏が苦心と手際は、一層男を賣り込んだのである、然かも氏が此の以前に於て如何なる境遇を過ぎ、如何なる動機より事業を計畫する段に至つたか、少しく紹介する所を見給へ。

大久保利通に知遇せらる

其昔しは丁稚奉公もすれば、外國人に雇れて奴僕ごやくの如く使はれたこともあり、時には通辯つうべんとなり、變心へんしん一番小間物屋せうまものやなどに化けるなど、此か若い時の苦心談は一朝一夕にして盡きない、只茲には故大久保利通の食客となり、明治四年支那に隨行した折、羅紗の原料に着眼

し、夫れが原因で前記毛織物製造所を設けるに至つた、因縁を摘んで申上げよう。

氏は種々職業換をしたが、何うあつても面白くないので、其揚句は時の内務卿たりし大久保利通を訪ひ、種々と嘆願の上同邸の食客に住み込んだ、然し食客だからといつてブラ／＼遊んで居る譯に行かぬ、で大久保主人公の給仕などを致し居つた、處が却々如才なきに彼れも非常に寵愛し呉れ、折々は氏を座に近く呼んでからに、生産の事や勸業の事を話し、時には鐵道はかふするとか乃至は羅沙の將來なかんを説かれて、切りに國の實業に心を注がれた、これが爲めに氏も斯道には多少智恵も付き、殊に氏の意見なども聞くもの

故、氏も一生懸命に書物を調べ、或時は先輩に密に問ふて、大久保の前に親しく答へたさうである、所が其後明治八年に大久保が全權大使を命ぜられ、支那へ行かれたが勿論氏も隨行を許され、北京へ着くと其時の駐在公使は有名な森有禮、或夜互に茶喫み話にふと毛織物の事が出た、氏も傍に在つて切りに聞いて居ると、元來羅紗の原料は多く支那の羊の毛である、夫れをば商賣に機敏な英米獨佛の商人が買ひ込んで、羅紗に製造しては東洋諸國に輸出する、詰りは原料を安く持つて行かれ、西洋人の手工を加へて今度は高く賣り付けられる、其頃は工業が未だ發達せぬもの故、獨り毛織物許りでなく、何にもかにもコンナ鹽梅式で、氏も誠に残念に思ひ居つたと

か。

ろこで大久保始め森有禮等も、是非日本で毛織物を拵へねばならぬ
といつて、種々の調査をした末、間もなく支那から羊毛を買入れ、
例の段通織を製造した、諸君中にも時の政府が勸農局を置かれて、
上總邊で製造に着手した事も、或は御承知の方もあらう、兎角する
うちに調査も済み翌九年大久保は氏を随れて歸朝した、其後は氏も
何うか毛織物を製造したいものだと、寸時も此の念が腦裡を去らな
い、四方を奔走した結果何程かの資本を得、殊には大久保も之に心
配して呉れたので、とふく獨立同業を經營する運を迎へた。

津久見雅雄

日露戦争に我海軍の目醒ましき勳は、彼れ敵の艦隊を全滅し、國威を遠く世界に轟
かした其功績は、實に千載に朽ちぬ譯さ、中にも氏の如き旅順大海戦に水雷艦に
長となり鬼神をも辟易せしむる程の大手腕さ、勇武は、只管賞賛の辭がない、獨り
氏は武勇の人のみにあらで、學識智望先輩を凌駕し居るを聞けば、追つては大將の
材であらう。

津田男のお影で二試験に合格

其故郷は作州勝山、慶應二年十一月生れとあれば前途有望の男じや、
處で書生時代を問ふて見ると、イヤハヤ苦學は一通りでなかつた、
恰度十六歳の折にかるく郷を後に東京に着くと、切りに食客口を
探がしたものの、適當の家が見當らない、己むなく縁戚なる廻町は番

町の津田男爵邸に轉がり込んで、最寄の私塾に通つては、一生懸命に勉強したが、扱境遇が境遇なれば何事も自分の勝手にする譯にもならず、不満足ながら之に耐へて、只管勉強にのみ熟中した。

氏は暫らくが間は津田の食客となつて居たが、勉強のお影で大分普通學も出來て來た、そこで翌十八年に東京郵便電信學校と海軍兵學校が、何れも入學試験を執行する話を聞き込んだ、之れは旨い學資の出ない我々共には、是非とも志題すべき場所でもあり又機會でもある、コ奴一番乗るか外るか試験に臨んで見ようと、早速願書を右の二校に差出したとは何處迄も慾が深い、やがて期日に夫れく試験をする、都合よくも狼へる二兎が同時に手に落ちたので、其結

果は兵學校の方を撰んで入學の手續を済ました、これにて初めて津田家を引下がり、軍隊生活を試みるに至つたのである。

兵學校在學中の出來事

序でながら兵學校に在學中の事を紹介しよう、日曜日や祭日には他の生徒は、何れも自宅に歸るのを常としたが、只氏のみは半ケ年程一度も津田の家に歸らぬので、男爵も何故彼は疎遠にするだらうと尋ねた、處だ氏の返事には、自分は學術精勵の上に一廉の功を積まなければ、如何に申さるゝとも歸郷は到さぬと果然答へたので、

津田も成程感心な奴だといつて譽め居つたとか。其後優等を以て、第一學年の試験にも合格し美事昇級されたので、

初めて日曜日毎に津田邸を訪ひ、且郷里の父兄にも音信したとか、かふいふ風で思想の程は却々固い、津田は氏の食客時代より、酒を飲まぬか煙草は喫はぬかと、彼是れ親切氣に問ふて見たけれども、成切迄は決して無益な金は遣いませぬと答へて應じない、其實津田は事に當り物に觸るゝ度毎に氏が性行を試験したさうで、何時も變らぬ堅忍克己の精神には、深く感じて居たとは津田男爵が自から語る所さ。

米相場

はなすも耳に

かゝりうと

梅浦精一

現代實業家中、三菱三井を中心として勢力を張つて居る者もあれば、澁澤安田森村其他の富豪を後楯として、切りに猛進突撃を試みて居る者もある、而して氏は確かに澁澤派中の一驍將巧みに機智才略を利用し、遂々今日の梅浦精一となつたのも偶然にはあらず、其昔し大藏省のヘボク官吏を拜命して後、決心一番歐米漫遊を試みたのが、氏をして實業界に足を入れしめた動機、ツツト以前の梅浦を寫し出さうものなら右の次第さ。

醫溝部某に救はる

氏が驟然決心江戸に上りた付ては、下の如き事情からで、元來郷里は越後の長岡、家は世々醫者をし居つた、親爺の修介は杵を矢張

り醫者にさせんものと、幼時々代には長岡藩士の山田愛之助といふ男の所に通はして、蘭學などを修めさせたが、慶應の四年に北陸の諸藩を主帥に反抗し、殊に長岡城は其要衝の地に當つた、何でか耐まらう筈もなし、城市は悉く灰塵に歸して仕舞つた騒ぎ、氏も今は流離困頓居るべき家依るべき師もあらばころ、此上は據なし一層の事江戻に出て、醫學を修めんものと決心致した。江戸に着く途中、困難は暫らく茲にお預りとし、其後石井謙道の門に飛び込んだ、飛び込んだはよいが何よりの學資を出して呉れる人もない、そこで學友の原田豊や同立卿等に頼んで、市醫溝部某の家に食客の身分となり、此家の業を助けて傍ら箕作秋坪先生の塾に通

ふたさうだが、抑も此箕作秋坪は諸君もかねて御承知の、箕作麟祥、菊池大麓、箕作佳吉、同元八兄弟の嚴父で、當時の學者中飛ぶ鳥も落す程の勢力を有つて居た、暫くの間此塾で勉強して居ると、却々學問の質もよく、加之に食客の身でありながら、少しも厭ひもせねば屈しもせず、家業を働いては餘暇くに勉める上に、成績も衆を抜いて居るので、何時しか此事が郷人の耳に這入つたものと見ゆ、有志者が事情を察して學資をば送る事となつた、茲に於てか初めて溝部の食客を辭したのである。

送資を絶はつて下宿屋にころがり込む所が肝腎の學資は出來たが、何うも醫學は面白くない、よし醫師に

なつたにせよ、我れに全然適して居らぬ、其適せぬものを曲げて勉強するにも及ばぬ譯だと、折角郷人の送資を斷り、且當初の目的を斷念して、再び或下宿屋にコロガリ込んだ。
若い時は前後の思慮もなく、明朝から生計に困まるのも關はず、思ひ切つた事を爲易い勝ちなもので、氏も矢張り此の徹を踏んだ、毎日下宿に寄食しては柵の牡丹餅を待つては居れど、如何でろう旨い譯に行くものか、困り果て、知己朋友を尋ね歩るき、何處なりと働くべき口を頼んだ、すると運よくも大藏省で雇か一人入用るといふ話、早速某官吏を煩はして身元引受人となつて貰ひ、當坐は某官吏の食客と迄住込み、日々大藏省に出動したさうである、之れより好

運が向いて來て給料は丸残り、然かも其残した金を以て歐米漫遊を試みたのが、抑も初めて實業界に名を出す發端と相成つたか。

かけこりの
言ひぐさ
になる居候

鳩山和夫

辯護士仲間でも又政治家仲間でも、古顔をして却々市を利かせてる、其風彩を云ひ其言行を云ひ、温厚篤實の君子然たる所、確かに氏が世に徳望を賣つた原因であらう、然し我輩恩師は氏が少壯時代を能く知つて居るので、問ふて見ると鳩山は如何にも愚なるが如くであつた、朋友仲間からも鼻垂らしといはれたが、才者才ならず愚者愚ならずの俗諺、果して氏は之に籍當つて居るらしい。

塾生より焼芋買の命令

明治元年上野の戦争が起りし時、氏は恰度十三歳であつた、學問の履歴は此時から始まつたと言つてよろしい、當時下谷の御徒士町邊に、海保辨之助と呼ぶ漢學先生が居つて、塾を開き盛んに少壯有爲

の青年を養ふた、元來氏が生地たる岡山の勝山藩は、誠に少さい藩ではあるが却々學問の方は奨勵し、何處へなり行つて學問しようなぞといふ篤學の士あれば、藩から學資として米一俵を呉れる慣例を設けられた、ソナナ譯で、氏も藩費で海保の塾へ行つたさうである。氏が或る人に語りし實話にも、元々家は貧乏で十三の時よりは、學資の一切は親の世話を受けた事はない、成程海保の塾に入るとせよ、藩費とした所で其の額が少々の爲めに、到底小遣などは一錢も遣はれぬ、夫れに塾生は何れも氏より五つか十も年齢の多い奴許りで、殆んど同年輩の者は一人もなく、加之に前言つた通りの境遇故、勢の巾も私かず、塾生が集まれば先づ種々の買喰が始まる、其時は他

の年長塾生は氏を捕へて、ヤイ鳩山何程丈焼芋を買つて来いとか、煎餅を買つて来いなぞと、殆んど小使同様に使れた、如何せん相手は年齢が多いので腕力はとても及ばぬ譯、夫れに氏は資力不足な爲めに、折々海保の恩恵を受けて居た事があり、ソナ始末で仲間連の酷遇を受けた、氏は苦學する以上は此位の辛棒はと、只素直に彼等が言ふ事を聞いてやつた代りに、本を教へて貰つたさうである、かふして苦學すること二年、十五歳の時更らに藩の撰拔を受けて、大學南校に入學した。

同生一致假病の魂膽

大學南校に入つてからは、食客的生活にはちと縁が離れて居るが

却々面白い話があるに依つて、お笑ひ草に申上げよう、抑も大學南校は最初専門の學科も無かつたけれど、二年の後には法律文科理科といふ三つの専門部がおかれた、此際學校では生徒に向つて、銘々法律なり文學なりさては理科なり、自分が志望の向を書いて出せとの通知に、氏は法律を出願した、恰度中山寛六郎齋藤修一郎清水彦五郎などは、同じ部屋に居つて勉強した方であつたが、其折大根といふ言葉が始まつた、何の譯かと尋ねて見ると、假病を遣つて教場に出ない隠語とやらで、これが前記連中の居る室より起つたのだ。

夫れは又何故に大根と名付けたものか、其次第はかふである、或日

の事一同は何か喰はふでやないかとの協議が持上がり、忽ち一決して賄所より、鍋を借りて来て、何なり煮る積りであつたもの、生憎誰れも金が無い、據處なく一番廉價い物は大根だによつて、コ奴を買ひ來つて内證で部屋へ持ち運び、賄所に忍び込んで醬油と砂糖をば捲上げ、例の大根を煮てウンと喰へるご、やがて翌朝になつて仲間の或者が今日は休まふではないかと發言した、所が其時分は醫者の證明を受けぬと休む譯に行かぬ、これにはトンと閉口したが、何に關はぬからよい加減な事を云つて抜けようと、かふ話を定めて早速醫者を呼びにやつた、中山は頭痛、漬水は腹痛なんぞ何れも假病を拵へて、さも苦しうにウナつて居る者もある、相直の醫者

は非常に心配して、銘々を眞面目くさつて診察したとは、飛んだ悪戯もすればするもの。
氏も同じく病人組に加はらねばならぬ、否な確かに加はつたが、實は何處も痛い所はない故、其ピンくした身體を、如何に白くくれるればとて餘りに馬鹿氣過ぎて居る、困り困つて唯手を出して病氣だと答へたら、醫者殿は氏を熟視ながら、貴方はコンナ悪戯をなさらぬによつて、何とか病名を付けて置いてやらうと云はれた時の氣まり悪さ、兎もあれ同勢七人は無事假病の試験に合格して、漸やく其日は休んで仕舞つたさうである。

浅野總一郎

其昔しはもでんの擔ぎ賣りから、薪炭竹皮の小賣店に、僅か許りの儲けを此上もなき樂みさした氏は、今は打つて變つた境遇、人間の將來程あてにならぬ者は無し、だが氏が成功も決して偶然にあらずで、其堅忍其熱誠、當時氏と共に相揃ふて越中の藪田村を後に東京へ出て來た仲間も澤山あつたが、先づ以て大成功者は淺野のみで、他は毫も世に知れなんだ、夫れも其筈成功後安逸に送らるべき身が、尙ほも意氣盛んに毎日の如く働いて居る、恐らくは今の實業家中にも、此くも活動的人物は少なからう。

昨日迄は御客今日は食客

氏が壯い時代のおでん賣りは、經歷中特筆大書すべき事柄で、且つ世に知らぬ者もないが、借何ういふ動機で左様な商賣をせねばなら

ぬ始末になつたものか、开も之れが本書の食客にも關係して來る、恰度明治の四年に親爺の泰順は、筍醫者を業とし、悴の氏にも是非此業を繼がせうとの考へではあつたもの、元來氏は醫者になるのが大嫌ひ、こりや一層東京に出て一苦勞して見ようと、茲に決心上京の途に就いた、元より父母の意に反對して居るので、旅費とても充分に貰ふ譯に行かない、僅か許りの金を懐ろに出て來たが、別に寄るべき者のない、同じ連れの者と別れて自分は本郷森川町邊の、或旅籠屋に投宿した。

自分は郷里を出る際には、東京に着けば直ぐにも雇はれ口が見當るものと、かふ合點して居た所へ、早や今日で五日も經つが何うも面